

物語化に抗する沈黙とアーカイヴ

—フランスのジプシー共同体における二種の記憶行為をめぐる 考察

左地亮子

<要旨>

フランスのジプシー、マヌーシュは、死者について沈黙し、それを敬意の振舞いだと説明する。そこでは、死者の個人的な記憶を集団的領域に開示し、生者が代表＝代理するという記憶の伝承法は、誤りや歪曲の可能性を含むがゆえに回避すべきこととされる。その一方、近年のフランスでは、第二次世界大戦期の強制収容をめぐる、ジプシー活動家によるコメモラシオン運動が活発化している。収容者に関する記録を公表し、収容所跡地に慰霊碑を建て、追悼式典を開催するこの運動は、一見すると、マヌーシュの沈黙と対立する。しかし本稿では、コメモラシオン運動のなかで用いられるアーカイヴという「記録と想起の媒体」に着目することで、表象をめぐる非文字／文字の静態的な対立をかわすように、二種の記憶行為が繋がりあうさまを示す。非ジプシーにより作成、収集、再発見された諸個人のアーカイヴをインターネット上に開示して活動家が立ち上げる「記憶の場」に現れるのは、「ジプシーの歴史」という全体的な物語ではなく、むしろそれへとたやすく溶解していかない個別的特異な生の痕跡である。本稿では、こうした記憶の個別性と共同性に関する問題をアーカイヴやイメージをめぐる議論を通して考察することで、マヌーシュの沈黙、活動家のアーカイヴ開示という二種の記憶行為が、集団の物語に回収されない個人の生／記憶をとりまく分有の体験を触発することを明らかにする。

過去という本にはひそかな索引が付されていて、その索引は過去の解放を指示している。じじつ、かつてのひとたちの周囲にあった空気の、ひとすじのいぶきは、ぼくら自身に触れてきてはいないか？ぼくらが耳を傾けるさまざまな声のなかには、いまや沈黙した声のこだまが混じってはいないか？ぼくらが希求する女たちには、かの女たちがもはや知ることのなかった姉たちが、いるのではないか？もしそうだとすれば、かつての諸世代とぼくらの世代とのあいだには、ひそかな約束があり、ぼくらはかれらの期待をになって、この地上にでてきたのだ。

「歴史の概念について」[ベンヤミン 1994: 328-329]

1 フランスのジプシーと記憶をめぐる問題の所在

1-1 フランスのジプシーにおける二種の記憶行為——沈黙とコメモラシオン

本稿は、フランスに暮らすジプシーの記憶行為について論じるものである。まず、フランスの「ジプシー」をめぐる名称とカテゴリーについて説明しておく。

今日、欧米諸国や日本では、「ジプシー (Gypsies)」の呼び名が内包する差別的な意味を避けるため、「ロマ (Roma)」という名でこれらの人々を総称することが一般的である。しかし、フランスでは、「ツィガン (Tsiganes)」や「ジタン (Gitans)」という日本語や英語の「ジプシー」に相当する名称が、一般社会のみならずジプシー自身によっても総称として使用されている。一方、「ロマ」にあたる仏語「ロム (Roms)」は、中・東欧諸国出自のジプシーの一部の人々の自称として、また近年では、フランスをはじめとする西欧諸国で外国籍移民として暮らす中・東欧諸国出自のジプシーを指す名称として限定的に用いられる。

フランスのジプシーは、主にマヌーシュ (Manouches)、ジタン、ロムと自称する下位集団に分かれ、その圧倒的多数¹は、早くて15世紀、遅くとも19世紀末からフランスに暮らしてきた国民である。そのため、彼らは「ロム／ロマ」と呼ばれることに抵抗感を示し、総称として「ツィガン」や「ジタン」の名を用いる。こうした背景から本稿では、世界各地のジプシーに関しては必要に応じて「ロマ」の総称も併記するが、フランスの文脈では、「ジプシー」を総称として、「ロム」や「ジタン」を下位集団名として使用する。

また、市民を人種や民族で区別することを避けるフランスでは、特定の民族を指すツィガンやジタンではなく、「移動生活者 (gens du voyage)」²という生活様式の差異にもとづく集団名も使用されている。この名称は、それまで用いられていた「ノマド (Nomades)」に代わって、1960年代から行政がキャラヴァン (キャンピング・トレーラー) などの「移動式住居に住むフランス国民」を指すために用いてきたものだが、現在では、非キャラヴァン居住者も含むフランス国籍のジプシーの総称として、一般社会およびジプシーのあいだで広く使用されている。しかし厳密には、「移動生活者」は、イエニツシュ (Yéniches) と自称するヨーロッパ土着の移動民³をはじめ、狭義 (インド起源) の「ジプシー」カテゴリーに属さないキャラヴァン居住者も指すため、本稿では、フランス国籍のジプシーおよび非ジプシーの移動民を包括する名称として、「移動生活者」を用いる。

このように移動生活者やジプシーと呼ばれる人々のなかでも、筆者はフランス南西部ポー (Pau) に暮らすマヌーシュを主要対象者とし、2006年から現地調査を続けてきた。そして、これまでいくつかの論考 [左地 2014、2017a、2017b] で、これらの人々の特徴

1 フランスのジプシーの総人口を示す推計はないが、後述する移動生活者の人口推計は、30万人から40万人とされる。対して、フランスに居住する外国籍ロマ移民は、約2万人と推測される。

2 直訳すると、この名称は「旅の人々」となるが、本稿では現地での意味合いに近い (過度にロマンティックではない) 方法で「移動生活者」という訳をあてる。

3 イエニツシュは歴史的にマヌーシュと同じドイツ語圏地域 (フランスのアルザス・ロレーヌや現在のドイツやスイスなど) に暮らしていたため、マヌーシュと共住し婚姻関係を結んでいることが多い。

的な記憶行為⁴に着目してきた。ポーのマヌーシュは、死者や過去の出来事について沈黙し、個々の死者が関わる事物・事象を集団的領域に開示することを避ける。そしてその理由を「死者への敬意のため」と説明する。死者や死者が関わる過去の出来事を共同で想起する、あるいは死者に代わって証言する、つまり生者が死者を代表＝代理して表象するという記憶の伝承法は、誤りや歪曲の可能性を含むがゆえに敬意に反し、回避すべきこととされる。

一方、現在のフランスでは、「第二次世界大戦期ノマド強制収容」という出来事をめぐって、ジプシーの活動家によるメモラシオン運動が活発化している。彼らは、「ノマド・キャンプ (camp des Nomades)」と呼ばれた強制収容所に隔離された人々に関する記録を公表し、収容所跡地に記念碑を建て、追悼式典を開催することで、過去の迫害を告発する。

本稿では、これら二種の記憶行為の関係を探っていく。「メモラシオン (commémoration、共同想起)」へ向かう活動家の記念追悼行為は、言語や物質を介した過去の「表象＝再現 (representation)」の実践にもとづく「集合的想起 (collective remembering)」の一つと捉えることができる [左地 2017b]。同じ集団に属し、特定の出来事を共有する他者と共同で過去を語り直し、表象することで、集団の現在のアイデンティティを紡ぐ、このような集合的想起のプロセスが埋め込まれた活動家の行為は、これまで筆者が観察してきたマヌーシュの沈黙の記憶行為——過去表象にもとづく集合的想起の回避と一見対立するものに見える。

実際に、活動家が開催した追悼式典を調査した際、筆者は次の状況を観察している。南仏カマルグ地方の町サント＝マリー＝ドゥ＝ラ＝メール (Saintes-Maries-de-la-Mer、以下「サント・マリー」) では、毎年5月に「ジプシー巡礼祭 (pèlerinage des Gitans)」が開催され、国内外からジプシーと観光客が訪れる。この巡礼祭は、日常の社会生活において周縁的な位置に追いやられ、差別や排除の対象とされているジプシーが歓迎され、地域住民や観光客という非ジプシーと融合、共存する非日常的な時空間としての性格をもつ。しかし、筆者がポーのマヌーシュと巡礼祭を訪れた2015年、その「融合」を物語る祝祭の場に「隔離の記憶」が挿入された。巡礼祭の日程にあわせ、近隣の村サリエ (Saliers) で「サリエ・キャンプに収容されたジプシー (Tsiganes) のための追悼式典」が開催されたのである。サリエでは第二次世界大戦中にノマド・キャンプが建設され、収容者に生死に関わる過酷な日々を強いたが、その事実は長らく歴史の闇に葬られていた。ジプシーの活動家は、こうした強制収容の犠牲者を追悼するため、式典を企画した。彼らは、式典開催に先立ち、サント・マリーの町中でサリエ・キャンプに関する展覧会を催し、SNSにより繰り返し情報を発信することで、仲間に式典参加を呼びかけた。筆者も、巡礼祭を訪れたポーのマヌーシュに式典の日時と場所を知らせた。しかし、結果的に式典に足を運んだ

4 本稿では、想起のみならず、沈黙や忘却をも包括する、過去に対する人間の意志的・無意志的な行為および態度を指して、記憶行為と呼ぶことにする。詳しくは本特集「序」も参照されたい。

のは、非ジプシーの政治家や団体関係者が圧倒的多数を占め、ジプシーと思しき人々は活動家や招待された一部の元収容者遺族のみであった。ポーのマヌーシュを含め、にぎわう巡礼祭の町に滞在していた多くのジプシーは、「迫害の過去」の想起を呼びかける式典に関心を示さなかった。

この巡礼祭と追悼式典での活動家と一般のジプシーの人々（特にポーのマヌーシュ）の様子を筆者は別稿〔左地 2017b〕で検討したが、ここでは以下の考察が導かれた。

コメモラシオン運動は、ポーのマヌーシュのような一般のジプシーの関心を惹かなかつた。ただし、本稿でも詳述するが、こうしたコメモラシオンへの関心の薄さは、マヌーシュの「死者への敬意」という観点を踏まえると、単純に過去に対する関心の薄さを示すものではなく、むしろ、個別的で特異な記憶をもつ死者を代表＝代理する集合的想起という行為の回避を示すものとなる。また、巡礼祭にあわせて強制収容の過去をめぐる式典を開催することで、サント・マリーとサリエという二つの異なる記憶が刻印された場を重ねあわせようとした活動家の「時間の経験」は、実はマヌーシュにも共有されていたものである。

活動家の想起の実践は、単に「過去」の迫害の告発にのみ向けられていたのではなく、融合の物語を主張しながらも、現実にはジプシーの町中への侵入や巡礼行事への参加を阻み、彼らを社会的・空間的に周縁化し続けるサント・マリーの「現在」に対する批判的行為を伴うものであった。そうして彼らは、隔離の記憶を「過ぎ去ったもの」として過去化することなく、「いまここにあるもの」として現在の生に織りあわせながら生きていたのである。筆者はこの「時間の経験」を「持続する現在」と呼び、それと同様の過去と現在の関係がマヌーシュのあいだにも見られることを指摘した。巡礼祭を訪れたマヌーシュもまた、町の周縁に追いやられたキャラヴァン宿营地（キャンプ）をはじめ、ジプシーと非ジプシーとの社会関係を感じさせる様々な事物を通して、ジプシーと非ジプシーの共存を物語るサント・マリーの町を「隔離の空間」として経験し、隔離収容という過去の出来事を「いまここにあるもの」として「持続する現在」のなかで感受していたからである。ただ、活動家は非ジプシーに向けて過去を告発するためにコメモラシオンという方法をとったのに対し、マヌーシュはそうした過去の表象や活用に関心をもち、自らの個別的で親密な領域で過去と接触する。両者を隔てるのは、この記憶行為の向かうベクトル、つまり記憶が誰に向けて差し込まれるのかという点であり、想起か忘却かという点ではないのである。

以上のように、コメモラシオンという記憶行為に対する活動家とマヌーシュの相反する態度、そしてそれにもかかわらず両者のあいだに通底する過去経験について筆者は考察してきた。本稿はこの議論をさらに発展的に論じるため、活動家のコメモラシオン運動のもう一つの側面——「アーカイヴ開示」活動へと分析の対象を広げるものである。

1-2 視座——アーカイヴをめぐる権力と共同性

マヌーシュは死者について沈黙し、集合的想起を伴う過去の迫害の告発を回避する。対して、ジプシー活動家はコメモラシオンの運動を展開して、過去の迫害を告発する。本稿

は、このマヌーシュの沈黙と活動家のコメモラシオン運動を検討するが、その目的は、これら二種の記憶行為を断絶や対立の関係で捉えることではない。むしろ目指すのは、一見相容れないように見える両者の記憶行為の繋がりを浮き彫りにすることである。

以下では、第2章で、ポーに暮らすマヌーシュの死者をめぐる沈黙の慣習について説明し、第3章と第4章で、強制収容をめぐるジプシーの活動家によるコメモラシオン運動の内容を追う。特に第4章では、活動家がコメモラシオン運動のなかで、「追悼式典の開催」という想起の試み以外に、「アーカイヴの開示」に着手している点を掘り下げて考察し、マヌーシュの沈黙、活動家のアーカイヴ開示という記憶行為の結びつきを明らかにする。

活動家は、フランス各地の文書館（仏語「アルシーヴ」）に収められていたノマド・キャンプの元収容者に関する様々な記録資料（アーカイヴ）をインターネット上に公開することで、「記憶の場」を構築しようと試みる。そのアーカイヴを用いたコメモラシオンは、第3章で論じる追悼式典と同様に、死者に関する事物・事象を集団的領域に開示することを拒むマヌーシュの態度とは正反対のものに見える。しかし、次のように活動家の二つの想起の実践が異なる効果を孕む点に着目すると、この対立図式は崩れていく。追悼式典が様々な記念装置を通して個々の犠牲者の声と顔を後景化し、「ジプシー迫害の歴史」という集団の物語を表象する一方で、アーカイヴを通して立ち上がる「記憶の場」には、そうした代表＝代理の物語り⁵に抗う犠牲者の個別特異な生の痕跡が充溢する。そしてここでは、非ジプシーによる迫害の告発のみならず、非ジプシー由来の媒体としてのアーカイヴを利用した「喪の作業」、および「ジプシー」という集団の境界を解体する別様の共同性が生起する。

ここで注目するアーカイヴとは、20世紀初頭から第二次世界大戦後までのあいだに、フランスの警察や行政が「ジプシー」を追跡し管理するために編みだした文字と写真による記録資料である。詳しくは次節にまとめるが、当時ジプシーと呼ばれた人々は、顔写真を撮影され、身体の各部位を測定され、指紋を採取され、そのすべての身元特定情報を「人体測定手帳」という文書に記録されていた。第二次世界大戦期のノマド強制収容に際しては、この人体測定手帳が活用されると共に、収容者に関する様々な記録が新たに残された。「アーカイヴはそれ自身の内容を生みだす。（中略）それは単に内容を受動的に受け取るのではなくその積極的な生産者なのである」[Alphen 2014: 54]。アーカイヴの原則を流用した芸術実践を論じるエルンスト・ファン・アルフェンのこの指摘は、ジプシーの事例にもあてはまる。アーカイヴという「記録の媒体」とそれをめぐる実践を通して、共和国の「内なる他者」としての「ジプシー」の同一性^{アイデンティティ}とカテゴリーが構築されてきたといえるのだ。

第4章では、こうした「ジプシー」をめぐる知と管理の道具としてのアーカイヴを開示

5 本稿では、「物語」ではなく「物語る」という言語的行為を強調する際に「物語り」という表記を用いる。野家啓一〔2007〕は、同様の観点から「物語り」を「ナラティブ」の訳語としても用いているが、本稿第4章でも、「イメージ」との対比を強調するため、「物語り」を「ナラティブ」と言い換えている。

する行為が、活動家にとって権力の不正の告発に繋がることを指摘する。しかし同時に、この章では、サイト上に集合的に羅列された様々なアーカイヴの特徴を詳しく検討することで、権力と暴力の問題に還元されないアーカイヴの力も論じていく。人間を数字やカテゴリーに変え、個別性 (individuality) を剥奪 [Alphen 2014] するアーカイヴが、逆説的に、人間の生々しく、それゆえに個別特異的で普遍的な生を照らし出す可能性、つまり、「記録の媒体」として用いられるアーカイヴが、本来付与されていた意味や機能を超えて、人間の共同性に働きかける「想起の媒体」として現出する契機を探る。

そのために、芸術家クリスチャン・ボルタンスキーのアーカイヴァル・アートをめぐる次の田中雅一の指摘を踏まえておきたい。モノクロに映しだされたり引き伸ばされたりして同じような顔つきになってしまった、個別性を剥ぎ取られてしまったような肖像写真の展示を主とするボルタンスキーのインスタレーションには、ホロコーストや人間の死を連想させるものが多い。前述のアルフェンは、そうしたボルタンスキーの作品が、人間を非人格的に取り扱う＝モノにする「ホロコースト効果」をもたらすと指摘する。なぜならそれらは、対象をそれが本来属していた世界＝文脈から引き剥がし、分類し並べるというアーカイヴ的記録の手法を用いることで、非人間化というホロコーストの原則を「再演」⁶ するためである [Alphen 2014: 199-211]。しかし、こうしたアルフェンの指摘に対し、田中 [2017] は、アーカイヴという形式にこだわることでホロコースト効果のみならず、それに抗する「喪の作業」がもたらされる可能性にも言及する。カテゴリーにもとづく選択と分類は、アーカイヴ活動の基本動作で、確かにそれは、「ナンバリング」という「人に連番をつけその固有性を剥奪する」暴力を行使する。ボルタンスキーの作品がこの種のナンバリングを再現し、ホロコースト効果を孕む点は、否定できない。しかし同時に、ボルタンスキーは、収容所に移送されたユダヤ人の文書や写真というアーカイヴの呈示を通して、「名前を剥奪された一人ひとりを数え上げ再び名を与える」という「カウンティング」を行ってもいるのではないかと田中は指摘する。つまり、アーカイヴは「唯一性」(本稿では「個別特異性」と呼ぶ)の回復としての「喪の作業」としても働きうるのだ [田中 2017: 98-99, 116-120]。

以上のように田中が指摘するアーカイヴの相反する二つの効果は、先に挙げた「記録の媒体」「想起の媒体」というアーカイヴの二つの性格にも関わる。そこでこの点を意識しながら、本稿では、ジプシー活動家がインターネット上に開示するアーカイヴについて検討する。具体的には、「記録と想起の媒体」としてのアーカイヴが集団の歴史と個人の記憶との往還のなかでどのように個人の生を照らしだし、どのような共同性を創出するのかという問題を考察する。そのため、第4章ではさらに、アーカイヴやイメージを単に権力や表象の道具として捉えるのではなく、その物質的、前-表象的な効果に着目する先行研究を参照する。それを通して、アーカイヴが、ときにその製作者や編集者といった様々な

6 ボルタンスキーの作品のなかでは、ときに無名の非ユダヤの人々の写真も用いられるが、アルフェンによると、それらは直接的にホロコーストを「表象」せず、その原則を「再演」し、見る者にホロコーストを想起させるという [Alphen 2014: 199]。

人間の意図を超え、人間が見いだす本来の機能や特性とは異なる効果を人間に及ぼすこと、そしてさらには、表象や主体の限界にさらされた人間の存在形態をも現出し、「決定的な分離と無媒介的な分かち合い」としての「分有」の共同性を触発することを論じていく。

ここで着目する共同性とは、出自や経験など何らかの同一性を共有する人間の紐帯を意味するのではなく、目的や運命を共有する個の集合体としての対象でも実体でもない。それは、フランスの哲学者ジャン＝リュック・ナンシーが死と共同体の相互開示性を論じるなかで指摘した、個の有限性を露わにし、他者を要請する死のような出来事を通して生起する「分有」としての共同性である。ナンシーは、「人がひとりで死ぬことができない」という事実、すなわち死が人間の「有限性（自己完結の不可能性）」を画するがゆえに共同性を露呈すると述べ、おのおのの特異な実存が互いの差異を失って融合するのでも、同一性を共有するのでもなく、その「特異性 (singularités)」において互いに存在を「分有 (partage)」する事態を「無為の共同体」と捉えた [ナンシー 2001: 26-29、40-53]。

以上のアーカイヴと共同性をめぐる視座のもと、本稿では、活動家がアーカイヴという「想起の媒体」を用いて立ち上げる「記憶の場」の特徴を検討する。それにより、コメモラシオン運動のなかで、表象の政治である追悼式典とは別様の共同性が創出されていることが明らかになる。また、このようにアーカイヴを通して創出される、一つの共通の本質のもとに個を他と同一化させることも集団的全体に溶解させることもない「分有」としての共同性が、代表＝代理の物語りを避けて沈黙するマヌーシュの死者哀悼のあり方と結びつくことも示される。つまり、マヌーシュの沈黙と活動家のアーカイヴは、個人の個別特異な生を集団のカテゴリーと歴史のなかに回収する「物語化」という表象プロセスに抗うものとして共に現れ出る。そこでは、沈黙とアーカイヴのあいだに横たわる、表象をめぐる非文字／文字の静態的な対立をかわすように、マヌーシュと活動家の記憶行為が集団の物語に回収されない個人の生と記憶をめぐる分有体験を触発する様子が浮き彫りになるだろう。

1-3 フランスのジプシーの歴史と文化的背景

事例の検討へと進む前に、フランスのジプシーの歴史と生活文化の概要を述べておく。まず、フランスにおけるノマド強制収容について、歴史家エマニュエル・フィロルの著作『フランスにおけるジプシー管理 (1912 - 1969) (*Le contrôle des Tsiganes en France (1912-1969)*)』 [Filhol 2013] を参照しながら説明したい。第二次世界大戦期、主にジプシーを中心とする「ノマド」と呼ばれた人々が、フランス国内に建設された約 30 のノマド・キャンプに強制収容された。「ジプシー」をめぐるフランスの法政策を分析した拙論 [左地 2016] がすでに詳述しているが、ジプシーを共和国の「内なる他者」として監視する政策は、20 世紀初頭から現在に至るまで繰り返されてきたもので、戦争の混乱のさなかに生じた例外的対応ではない。第二次世界大戦以前から、フランスのジプシーは、「人体測定手帳 (carnet anthropométrique)」(写真 1) という指紋や顔写真付きの身分証明書の保持を義務づけられ、移動を徹底的に監視追跡される対象となっていた。



写真1 人体測定手帳（2015年5月筆者撮影） Archives Départementales de Vaucluse, 4M53

1912年の法律「移動式職業の行使とノマドの交通規制に関する1912年7月16日法」（以下「1912年法」）⁷制定から1969年まで、「ノマド」の法的カテゴリーを与えられた人々に発行された人体測定手帳とは、犯罪者の身元確定と追跡のために1880年代に警視庁のアルフォンス・ベルティヨンが考案した「人体測定法」にのっとり、国籍や職業や出生地・日時・家族の氏名等の情報に加え、指紋、瞳や髪の色、耳鼻の形状、頭囲等の身体細部の特徴を網羅的に記載した身分証明書である。ノマドは、町や村への到着と出発の際に役所や警察署でこの手帳に査証を受けることを義務づけられていた⁸。どの人物が「ノマド」カテゴリーに該当するののかという基準は、同法第三条で、「国籍の有無を問わず」「固定住所も固定住居ももたずに移動する」個人と示されるにとどまったため、実際の適用範囲は地域や年代や担当当局（警察組織や自治体各局）ごとに違っていたと推測できる。ただし、1912年法制定以前から行われていたノマドをめぐる人口調査や議論が、「ジプシー」に先立ち「ボエミアン」や「ロマニシエル」と当時呼ばれていた人々⁹をノマド

7 *Loi du 16 juillet 1912 sur l'exercice des professions ambulantes et la réglementation de la circulation des nomades*

8 以下、ジプシーをめぐるフランスの法政策の詳細は、左地亮子 [2016] を参照されたい。

9 「ボエミアン (Bohémiens= ボヘミア人)」は、本来、東方から来た異邦人を意味する。他方、「ロマニシエル (Romanichels)」は、ジプシーの言語ロマネスで「人間 (男)」を指す「ロム (Rom)」に由来する。しかし、フィロル [Filhol 2013] の分析資料が示すように、この二つの名称は、ノマドと並んで明確に区別されず、20世紀前後のフランス一般社会ならびに新聞や議会や警察で用いられてきた。現在のフランスで「ジプシー」と呼ばれる人々を指していたとされるノマド、ボエミアン、ロマニシエルの名称には、しばしば人種 (race)、部族 (tribu)、民族 (peuple) という用語が付加されていたが、民族的・人種的な定義が明確になされていたわけではない。これらの名称は、ときに「浮浪者 (vagabond)」や外国から流入した住所不特定者を含む、「架空の民族性」にもとづいた差別的なカテゴリーであった。

と明確に同一視していたこと、また、フランスの文書館に保存された人体測定手帳の記録から、このカテゴリーはジプシーを主たる対象としていたとされる [Filhol 2013: 59]。20世紀初頭、ジプシーは、移動しながら住民に多種の商品（籠や布などの日用品）やサービス（芸能等の娯楽や家具修理や農作業）を提供する経済活動に従事していた。1912年法は、これらの人々を、国籍も移動の理由も問わず、それゆえ浮浪者や外国からの流民も含むカテゴリーに分類し、犯罪者と同様の方法で身元を追跡すべき対象者としたのである。

その後、第二次世界大戦勃発直後から、ジプシーは、敵国ドイツのスパイ¹⁰や国内治安を脅かす危険な移動集団とみなされて移動を禁じられ、ドイツによる占領が始まった1940年から終戦1年後の1946年までは、国内各地に建設されたノマド・キャンプに隔離された。このとき収容者選別に用いられたのは、人体測定手帳である。推定6,500人のノマドが収容所に移送され、その大多数が「フランス国籍のジプシー」であったことは、当時の書類や証言から明らかにされている [Filhol 2013: 183]。

フランス政府により建設運営されたノマド・キャンプは、ナチス・ドイツの絶滅収容所とは異なり、強制労働や殺戮を目的としなかったとされる。その目的は、戦時中の国内治安維持のためとも、ノマドを定住させて教化するためであったともいわれるが、結果的に収容所の過酷な環境下で命を落とす人々は多数となった。また、ユダヤ人のケースほどには徹底されなかったが、約300人のノマドが国内の収容所を経由して国外の絶滅収容所に移送されたという [Filhol 2013: 183-184]。これらの措置は、ドイツ軍の命を受けてなされたと主張される一方で、誰をノマドとみなし、収容するのかを判断する際に依拠されたのは、1912年法等のフランスの法令であり、実際にノマド移送業務も収容所運営もフランスの警察と行政が担っていたことが、当時の記録から判明している [Filhol 2013: 160]。

第二次世界大戦終息から1年経ち、最後のノマド・キャンプ収容者が解放された。その後20年以上を経た1969年には、新法「移動式活動の行使と固定住所・住居なしにフランスを移動する人々に適用可能な制度に関する1969年1月3日法」（以下「1969年法」）¹¹が制定され、人体測定手帳制度は終了した。しかし1969年法は、当時「ノマド」に代わり「移動生活者」と呼ばれ始めていたジプシーに、人体測定手帳の機能を受け継いだ通行証「移動手帳 (carnet / livret de circulation)」の携帯と査証を義務づけた。この一部の国民に国内通行証を求める制度は、2016年末にようやく撤廃が決定された（3-3で詳述）。

以上のように、フランスのジプシーは約100年にわたり、特別監視と隔離の対象となってきた。しかしその一方で、ジプシー当事者による迫害の告発や権利獲得運動は、1990年代に入るのを待たねばならなかった。フランスのこの状況は、戦後から徐々にジプシーやロマの当事者運動が開始されたドイツや中・東欧諸国の状況と比して遅れをとっていた。

10 ジプシーがドイツのスパイとみなされたことには、彼らが国境地帯を頻繁に移動していたことだけではなく、19世紀後半までドイツ語圏に大半が暮らしていたマヌーシュのように、ドイツ語系の名をもつ家族が多くいたことも関係しているとされる。

11 *Loi n° 69-3 du 3 janvier 1969 relative à l'exercice des activités ambulantes et au régime applicable aux personnes circulant en France sans domicile ni résidence fixe*

そのことには次の事情が関係する。第一に、本稿でも検討するように、死者をめぐる沈黙の慣習は、過去を語り表象するコメモラシオンに対する関心の低さに影響する。第二に、フランスではジプシーの定住化が比較的ゆるやかに進行したことから、政治的な運動を展開するうえで最低限求められる社会文化的な同化も進まなかった点を挙げることができる。歴史的に早い時期から各地域社会で定住を開始した他国のジプシーやロマとは異なり、フランスのジプシーは第二次世界大戦後も移動生活を活発に続けてきた。1960年代頃から急速に進行した都市化と高度経済成長の影響を強く受け、現在では、多くの人々が移動生活を縮小し、都市の周縁で定住性の高い生活を送るようになった。しかし、彼らの多数は依然としてキャラヴァンに暮らし、経済活動や宗教・家族行事への参加を目的とした季節的な移動生活を行い、その生活様式から就学や就労、共住を通じた多数派社会との日常的な関わりはいまだ限定的である。そして第三に、この生活様式の差異がリテラシー状況にも関係して、フランスのジプシー当事者運動をいっそう難しくしていると考えられる。世界諸地域のジプシーやロマと同じく、フランスのジプシーは文字をもたない言語「ロマネス (*Romanes*)」を母語とする¹²。彼らは、仏語を日常的に話し、近年では初等教育での就学率も向上している。しかし、定住の歴史が長いスペインやドイツ、中・東欧諸国のジプシーやロマと比べると、全体的に識字率は低い状況にとどまる。

このように、死者をめぐる慣習、移動の生活様式、非文字文化という要因が、フランスのジプシーのコメモラシオン運動に影響していると考えられる。しかし、上記のいずれも決定的な理由とはならないことも、指摘しておきたい。後述するように、ポーのマヌーシュにおいて見られるような沈黙や遺品の放棄をはじめとする死者をめぐる振舞いは、フランス他地域や他国のジプシー／ロマ諸集団において観察されている。しかし、地域や集団ごとに異なる生活文化を保持するフランスのジプシーに、この慣習の影響がどこまであてはまるかは定かではない。マヌーシュに限っても、ポー以外の地域では活動家や遺族代表として強制収容をめぐるコメモラシオンに参加している人たちがいる。また現在、ジプシーの迫害の歴史と現状を告発する運動を担う活動家は、ジタンやマヌーシュなどのフランスのジプシーの様々な下位集団の諸個人（イエニッシュなど移動生活者個人も少数含む）であり、彼らのすべてが多数派社会のなかで同化した生活を送るわけではない。活動家は家族や地域集団のなかで、ときにポーのマヌーシュと同様に、キャラヴァンでの移動生活を続けながら日々の生活を営む人々である。さらに、すべての活動家が文字の読み書きを得意とするわけでもない。反対に、ポーのマヌーシュのなかには文字の読み書きを日常的に行う人々も少数ながら含まれるが、彼らは活動家のコメモラシオンには関心を示さない。

したがって、本稿で検討していく二種の記憶行為——マヌーシュの沈黙と活動家のコメモラシオン運動の差異を導く背景について、明確な答えを導き出すことはできない。ただ

12 インドのサンスクリット語やギリシャ語の影響を強く受けた言語。ポーのマヌーシュを含め、フランスのジプシーは、ロマネスと仏語を日常的に併用する。本稿では、他言語と区別するためにロマネスを斜体で記すことにする。

し、本稿の文脈では、次の点に留意すべきである。ポーのマヌーシュは、死者をめぐる固有の慣習とキャラヴァン居住という独自の生活様式を維持し、いまだ識字率も低く、教育や就業を通じた多数派社会への参入という点では社会文化的な同化も進んでいない。このように、マヌーシュがフランスのジプシーの昔ながらの一般的な姿をあらわすのに対し、活動家は、SNSなどのインターネットツールを用いて自らの声を発信し、地方や国の機関に直接その声を届ける力をもつ人々である。すなわち、文字に関わる媒体を活用し、多数派社会においてオーディビリティ（声を聞かれる力）をもつという点で、活動家とポーのマヌーシュを含む市井のジプシーの人々のあいだには看過できない差異がある。

2 死者をめぐるマヌーシュの沈黙

2-1 歴史や過去に無関心な人々？——ジプシー社会における集合的想起の回避

それでは、フランスのジプシーの記憶行為の一つめの様態として、マヌーシュの死者をめぐる沈黙の振舞いについて検討していく¹³。世界の諸地域に暮らすジプシー／ロマは、集団や地域ごとに歴史や文化や生活を異にする。しかし、これらの人々のあいだでは、死者や共同体の歴史などの過去の出来事に対して無関心であったり、それらを忘却したりするという共通した態度が指摘され、多くの人類学者がその記憶行為の特徴と集団的アイデンティティとの関係に注目してきた [e.g. Williams 1993; Stewart 1997, 2004; Gay y Blasco 1999]。たとえば、フランスのマヌーシュは死者について沈黙し、遺品を廃棄するが、それは個別的特異な存在者としての死者を忘却することが、集合匿名的な祖先と生者からなる集団の統一性を保証するためだとされた [Williams 1993]。同様に、スペインのジプシーであるヒターノの事例でも、想起を回避し過去を現在から取り除く振舞いが、「現在のヒターノ」という想像の共同体を打ちたてる営為となるとされた [Gay y Blasco 1999]。

1980年代以降、人文諸科学の様々な領域で、人々が共に行う社会的実践としてのメモラシオンが注目されてきたが、ジプシーに関する人類学的研究では、人々が過去を共同で想起するのではなく、沈黙し、現在からその痕跡を取り除くことで、集団のアイデンティティを生成、維持するプロセスが照らされ、メモラシオンの不在という視点から記憶の社会的構築や記憶による社会構築というテーマに新たな光が当てられてきたといえる。

筆者の調査地ポー地域に暮らすマヌーシュのあいだでも、先行研究の報告内容と類似する振舞いが見られる。「それについて言うてはならない、私たちは敬意をもっているのだ」。マヌーシュのもとで過ごしていると、こうしたせりふをしばしば耳にするが、この言葉は、死者の名前や死者が関わる出来事を誰かが思いがけず口にしたときなどに挙げられる。ポーのマヌーシュは、死者に属し死者を喚起する有形無形の事物を生者の集団的な

13 以下、本章をはじめとするマヌーシュの死者をめぐる沈黙に関する記述は、既出の論考 [左地 2014, 2017a, 2017b] を要約したものであるため、詳細はこれらを参照されたい。

領域から取り除こうとする。彼らは、死者の名前や死者にまつわる思い出を口にすること、死者が生前好んだ音楽を聴き、好んだものを飲食することを回避し、衣服などの死者の身の回りの品や自動車を放棄する。たとえば、死者のキャラヴァンは中古車・廃品業者に売却されることはあっても、マヌーシュ生者に譲り渡されることはない。死者が生前丹精込めて手入れしていた庭は、死後、放置されて雑草が生い茂る空き地となる。そして、これら死者をめぐる振舞いを、マヌーシュは「敬意 (*ēra* / *respect*)」のしるしだと説明する。死者に敬意を払うため、生者は死者に属する事物を喚起、保存するのではなく、回避あるいは放棄する。

死者をめぐる同様の振舞いは、共同体内部だけでなく、外部社会に向けても生じる。つまり、非ジプシーからなる一般社会においても／向けても、マヌーシュは死者について語ったり、死者に関わる事物を展示したりすることを避け、死者に関わる事物・事象を集団的かつ明示的に開示、想起しない。そしてそのため、ポーのマヌーシュのあいだでは、第二次世界大戦中の強制収容体験についての証言告白が拒否される事態も生じてきた。こうしたポーのマヌーシュにおいても観察される「想起の回避」の態度から、上に挙げたジプシー人類学の諸研究は、「ジプシーは過去に関心をもたない、過去を忘却する」と指摘してきた。この「歴史や過去に無関心な人々」という見解に対し、筆者はすでにいくつかの論考〔左地 2014、2017a、2017b〕で批判的に検討してきた。集合的想起の回避が過去の忘却や無関心に単純に結びつくのか、つまり、過去について饒舌に語らない人々は、いかなる過去にも無関心で、過去をいかなるかたちでも共有しないのか。こうした問題を次にあらためて検討するが、そこで重要となるのは、先述のように、マヌーシュが沈黙の理由を死者への「敬意のため」と説明する点、そして、マヌーシュが沈黙や回避・廃棄の措置をとる事物・事象が死者の個別特異な存在のあり方に関わるものだという点である。

2-2 代表＝代理を回避する振舞いとしての沈黙

沈黙や回避の対象となるものは非常に広い範囲にまたがるが、ここでは、「ロマノ・ラップ (*romano lap*)」と呼ばれ、持ち主の死後に沈黙の対象となる「マヌーシュの名前」について取り上げたい。ロマノ・ラップは、共同体内部の他者の名前と重複せず、個人に固有のものである点が重視される個人名である。マヌーシュは命名の際に周囲に同名者がいないかを確認し、死者のロマノ・ラップが受け継がれることも避ける。また、ロマノ・ラップは一度きりの命名行為により個人に定着するものではない。個人は、幼少期に特定の名前で周囲の人々から呼ばれるようになり、その呼びかけに応答する。ある特定の名前がある人に固有のロマノ・ラップとして定着するのは、こうした個人と周囲の他者との日々の相互行為の積み重ねを経てからである。そして持ち主の死後、そのロマノ・ラップが口にされなくなる。誰とも重複しない個人固有のもので、他者との相互行為を通して特定の人物の身体に染みついた名前は、その唯一の所有者の死後、決して口にされてはならないものとなる。

先に触れたように、この他にも、死者が生前好んでいた飲食物や歌なども回避の対象となり、衣服やキャラヴァンといった死者個人の持ち物も廃棄されるなどして生者の集団的

領域から消える。つまり、名前と同様に、生きていたときにその人と特別な関係を結んでいた、その人物の個別特異性を指し示す事物・事象が、その死後、回避・廃棄の対象になる。

同じ理由で、死者に関わる過去の出来事も沈黙の対象となる。マヌーシュの若い世代は、祖父母が第二次世界大戦中に強制収容所にいたことを知っていても、具体的にどの収容所でどのような出来事があったのかを知らない。そのような情報が体験者から伝えられないためである。ポー地域で1990年代初頭、非ジプシーの研究者がノマド・キャンプについての聞き取り調査を試みたことがある。マヌーシュや地元の移動生活者支援団体関係者から筆者にもたらされた説明によると、その際、研究者が直接聞き取りを行うのではなく、マヌーシュの若者にテープレコーダーを渡し、彼らを通じて彼らの祖父母の証言を得る方法が試みられたという。強制収容の出来事は、すでに故人となった人々の記憶を含み、死者について沈黙するというマヌーシュの慣習に抵触するうえ、それを共同体外部の人間に対して証言することがはばかれるのではないかと危惧されたためである。しかし結果的には、証言者は現れず、計画は断念された。当初、若者のなかには祖父母のもとで聞き取りを試みた人もいたが、証言を得ることはできなかったのだという。

筆者がマヌーシュの若者から聞いたところによると、年配者のなかには、自分の強制収容体験について話そうとする人もいる。しかし、結果的に語られる内容は「あの時代は辛かった」など、具体性を欠いたものとなるようだ。過去の迫害体験は語られるが、いつ、どこで、誰に、どのようにその出来事が生じたのかという個別具体的な内容は伝承されないということである。マヌーシュの年配者は、自らの体験を語ろうとするが、戦時中やそれ以後に死に別れた家族や仲間の体験について一切触れないので、他者の記憶とどうしても混ざりあう自分自身の体験についても語る内容が限られてくると考えることができる。

以上のように、マヌーシュが死者の個別特異な存在のあり方に関わる事物・事象をめぐって沈黙や回避の振舞いをとることがわかる。しかしそれではなぜ、マヌーシュはそうした振舞いに敬意という価値を与えるのか。この点に関しては、ポー地域と類似する振舞いをフランス中央部マシフ・サントラル地方に暮らすマヌーシュのもとで観察した、人類学者パトリック・ウィリアムの次の指摘が重要となる。ウィリアムは、マヌーシュの死者をめぐる態度を、死者を「損なうことなく」適切に共同体内部に位置づけ直すための手続きとして解釈した [Williams 1993]。それによれば、生者が死者の名前を呼んだり死者の遺品を扱ったり、死者の思い出を語ることには、必ず「間違い」の可能性があり、その可能性が生者を苦しめる。死者に関わる事物・事象の間違いや変形は死者の静寂を損ない、生者との共存を脅かすためである。

マヌーシュは、死者の存在を損なうことを恐れ、死者に属する事物・事象を取り扱うことを避ける。筆者は、ポーのマヌーシュの事例でもこの指摘があてはまり、そこから過去の迫害をめぐる証言やコメモラシオンに関心を示さない彼らの態度の一端を理解することができる。マヌーシュは、個人の身体やその生に染みついた名前や持ち物と同様に、死に際しても個人と切り離しえない過去の出来事を生者世界の文脈で他者が呼び起こしたり、死者に代わって、死者を代表して語り直したりすることに伴う誤りや歪曲を避け

るがために沈黙する。そしてそれゆえに、その沈黙には敬意という価値が与えられる。

しかし筆者は、ウィリアムが、マヌーシュの沈黙について個別特異な存在者としての死者を「忘却」し、「集団の永続性」を保証する「匿名の祖先」に変換する手続きと捉える点には同意しない。ウィリアムは、沈黙が死者の代替不可能な「特異性＝単独性 (singularité)」を表明すると同時に、それを「全体性」と「匿名性」に帰すると指摘する。「(死者は) 少しずつその特異な／単独の性質を失う。そして集団、マヌーシュ、〈我々〉という全体に対する忠誠だけを残し、死者たちはそうして集合的・匿名的に(集団の) 永続性を保証する」[Williams 1993: 15-16]。このように、ウィリアムはマヌーシュの沈黙を忘却の実践と同一視するが、マヌーシュの死者をめぐる態度をさらに検証すると、死者の特異性＝単独性を忘却するのではなく、生者のもとに留めおくための様々な振舞いが見えてくる。

死者をとりまく沈黙は埋葬後に始まる服喪の期間に生じるが、マヌーシュの服喪において特徴的なのは、その終了を告げる儀式や手続きを欠くという点である。また、マヌーシュの沈黙の慣習は、死をめぐる共有された集団的な対応であるものの、厳密にその内容が規定されているのではない。親族以外の人も喪に服すことがあり、服喪対象者の範囲も明確ではない。残された人は、周囲の人々に対して表明やその理由の説明をすることなしに、死者に対する自らの考えや感情にそって各々服喪の内容や期間を決める¹⁴。

つまり、喪明けを明示する多くの社会で観察される死の通過儀礼とは異なり、マヌーシュの服喪は個人の意思決定に任されて明確な終了の区切りをもたない。そしてそこでは、死者はいつ集合匿名的な祖先の世界へと移行するのかわからないまま、生者世界の内にとどまり続けることになる。個別特異な存在者としての死者はたやすく忘却されず、「死者から祖先への移行」という通過儀礼の物語はいつ終わるとも知れず引き延ばされる。

また、もう一つ重要な点として、マヌーシュは、死者について集団で語ることや死者の遺品を集団的な領域で取り扱うことを避けつつ、他方で、集合的想起とは異なる別種の想起を個別的で親密な領域で行うことにも注意する必要がある。実はひそかにマヌーシュが死者の写真や遺品をキャラヴァン内の戸棚に隠しもつということがあるのだ。死者の写真は、キャラヴァンを所有する生者によって一人で、あるいは限られた親密な他者と共に手にとられる。また、一般的な行為とはいえないが、死者が所有していたアクセサリ類を、遺族が手元に残していたケースも筆者は耳にしたことがある。しかし、遺族はそのことを公言したり、それらを身につけて人目にさらしたりすることはなかった。これらの保持される写真や装飾品と、放棄されるキャラヴァンや庭との違いは、前者が人目を避けて、また死者に属すものだとわからない方法で手元に保持されうるといふ点にあるように思われる。限られた遺族の手元を離れて集団的な領域におかれる場合、それらが死者の意

14 たとえば、喪服として黒服を着る習慣のあるマヌーシュ女性が喪の開始から1年ほど経って黒服の着用をやめることや、反対に10年以上経ても着用し続けることがあるが、周囲の人々はその判断に関与せず気にもかけない。服喪の期間は定められておらず、その決定は服喪者個人に委ねられる。

にそぐわない、敬意を欠いた方法で使用されたり傷つけられたりする可能性はより大きくなるのだろう。

このようにマヌーシュは、死者への敬意という観点から、他者の代表＝代理としての想起を選ばないのであり、死者の写真や遺品を集団的な領域に開示することを拒みながら、残された痕跡と個別的に接触し、その親密な痛みの領域において死者を想起する。つまり、死者をめぐる沈黙のもとでは、死者を忘却するのではなく個別特異な存在者として生者の世界に留めおくための別種の想起——「個別的で親密な想起」が生じているのだ。

集合的想起は過去の表象＝物語化を通して集団の現在を支えるものであるが、「現在における過去の再構成」や「生者による死者の表象」というプロセスには忘却や歪曲が伴う。こうした表象＝物語化の暴力性にマヌーシュは敏感なのだともいえる。マヌーシュの集合的想起の回避は、確かにある種の過去の忘却を導くが、その一方で、表象＝物語化に際する忘却や歪曲に抗いながら、死者を損なうことなく生者世界に留めおくことを目指す。その振舞いは、過去に対する関心の薄さや忘却の態度に由来するのではなく、むしろ、死者への敬意、死者の個別特異性の保護という観点から、生者（他者）の代表＝代理を回避するものである。この意味での沈黙による死者哀悼の方法を選ぶ人々が、収容体験の証言や追悼式典などの過去の表象に関心を示さないのは不思議なことではない。彼らは、死者をめぐる集合的想起が、現在の文脈で他者を代表＝代理し、忘却や歪曲を導くことを危惧するのだ。

以上のように、死者の個別特異な存在のあり方を注視し、集合的想起と物語化を避ける振舞いとして、マヌーシュの死者をめぐる沈黙の特徴をまとめることができる。次に、このマヌーシュの沈黙の態度とは明らかなコントラストをなすように見える、ジプシー活動家の第二次世界大戦期強制収容をめぐるコメモラシオン運動について考察していく。

3 ノマド強制収容をめぐるコメモラシオン運動

3-1 「忘れられた歴史」の告発——コメモラシオン運動の背景と展開

ヴィシー政権下（1940年－1944年）でのノマド強制収容という出来事は、現在でもフランス社会では周知されておらず、「忘れられた歴史」とも呼ばれる。フランス各地に約30建設されたノマド・キャンプはすべて跡形もなく取り壊され、そこに収容されていた人々についても文書館に限られた資料が残されるのみである。このように得られる情報は乏しいものの、前掲のフィロル [Filhol 2013] によると、ノマド・キャンプには、使われなくなった古城や石切り場、駅やサーキットを再利用したもの、収容施設として新たに建設されたものまで、いくつかの種類があったとされる。そして、正確な総数は不明であるものの、収容の最中やその直後に死亡した人々に関する記録も残されており、彼らの死には、戦時中の慢性的な食糧不足、衛生・防寒設備を欠いた収容所の過酷な環境が大きく影響していると考えられている。たとえば、サリエに建設されたノマド・キャンプは、外観こそ著名な建築家によりカマルグ伝統建築の様式が施された体裁を保っていたが、内部には水道も電気も暖房も備えられなかった。冬のあいだ凍りついたミストラル（地方風）が

吹き荒ぶこの地で、収容者は飢えと寒さに苦しみながら暮らすことを余儀なくされたのであり、この環境が乳幼児や老人を含む収容者の死亡を招いたと指摘される。

戦後、ノマド・キャンプの存在は歴史の闇に葬られていたが、1990年代から調査が開始され、研究者や活動家がフランス各地の文書館に眠っていた資料や元収容者の証言を公表することで、その事実を社会に訴えていった。1990年代は、ヴィシー政権下におけるユダヤ人迫害をめぐる議論が高まり、その歴史的事実の公的な承認と謝罪が果たされた時期である。フランスではドイツ占領体制崩壊後、国民抵抗の物語「レジスタンス神話」が強調されてきたため、ジプシーやユダヤ人の国内強制収容や国外移送など、フランスの加害者としての戦争責任を問う声が強まらなかった。しかし、ユダヤ人に関しては、1995年にシラク大統領（当時）が「ユダヤ人迫害の日」の記念式典に出席した際に「国家の過ち」を認め、ホロコーストに対する国家的責任を認めた法律も2000年に成立した〔渡辺1998〕。

こうしたユダヤ人迫害をめぐるコメモラシオンの動きに促されるように、ノマド強制収容をめぐる調査研究が進められていった。当初この調査研究に携わったのは、ノマドやジプシーの生存者でも子孫でもなく、一般のフランス人である。サリエ・キャンプの場合は、地元カマルグに暮らす写真家マティユ・ペルノが、1997年にサリエの「忘れられたキャンプ」について偶然耳にし、その後生存者を対象とした証言収集や文書館での資料調査を進めたことから、その事実が明らかにされていった〔Pernot 2001: 3〕。

このように、ノマド強制収容の歴史的事実は非ジプシーの様々な個人や団体の調査により再発見され、徐々に明るみにだされていった。そしてそれらの調査にもとづいて、2000年代後半からジプシーの活動家が運動を開始した。彼らは、文書館にて発掘された収容所に関する記録を公表し、キャンプ跡地に記念碑を建設し、追悼式典を開催してきた。

これら一連のコメモラシオン運動が目指したのは、ユダヤ人と同様に、ジプシーに対する迫害に対してもフランス国家による公的な承認を得ることであった。そしてそれは、フランスのノマド・キャンプでの最後の収容者解放からちょうど70年を経た2016年10月29日、ついに達成された。オランド大統領（当時）が、フランス中西部メヌ＝エ＝ロワール県のキャンプ跡地にて開催された追悼式典に出席し、ノマド強制収容の国家的責任を認めて謝罪したのである。新聞には、追悼式典に参加し、記念碑の前で演説し、元収容者や遺族に言葉をかける大統領の写真と共に、「フランスがジプシー収容の責任を認めた」（Le Monde «La France admet sa responsabilité dans l'internement de Tsiganes de 1940 à 1946», 29/10/2016）、「共和国がノマドの苦しみを承認した」（Montreuil-Bellay «La République reconnaît la souffrance des nomades» 29/10/2016）という見出しが掲載された。

3-2 追悼式典開催——コメモラシオン運動の第一の側面

追悼式典の開催という活動家によるコメモラシオン運動は、大統領をはじめとする政治家とメディア関係者の参加を伴うものへと展開し、フランスのジプシーの政治的エンパワメントの高まりを示すものとなった。追悼式典は基本的にはフランス各地のノマド・キャンプ跡地で年間を通して開催されてきたが、この数年は、パリのシャンゼリゼ通り、シャ

ルル・ド・ゴール広場にあるエトワール凱旋門下で、国際的な「ロマ・ホロコースト記念日」である8月2日に催されることも恒例となっている。この記念日は、アウシュヴィッツ強制収容所のガス室で「ジプシー」と呼ばれた約3,000人の男女と子どもが虐殺された1940年夏の一日に由来する。また、「無名戦士の墓」があるこの広場は、フランスという国家のために命を落とした人民を弔うナショナルな記憶の場でもある。式典では、その「無名戦士の墓」に灯された炎を前に国際的な「ロマ民族旗」（後掲の写真5参照）が掲げられる。このロマ民族旗は、世界のジプシー／ロマの総称を「ロマ」とすることを定めた、第一回世界ジプシー会議（First World Gypsy Congress: 1971年ロンドン開催）で承認されたものだ。

このように8月2日の追悼式典では、フランスのノマド強制収容犠牲者の記憶は、固有の歴史的・地理的な文脈を捨象したトランスナショナルな「ロマ・ネイション」、そして「フランスというネイション」の集団的過去という「大きな物語」のなかに織りこまれる。本節では、こうした活動家のメモリアル運動が紡ぐ集団的過去の表象について探るため、筆者が2015年に現地調査を行ったサリエでの追悼式典の事例を検討する。

先述のように、サリエ・キャンプの歴史は、写真家ペルノによる1990年代末の調査を経て明らかにされた。その際、ペルノは、自らが集めた生存者の証言や撮影写真、文書館にて発掘した元収容者に関する記録資料を地域の展覧会などで公開した。そしてこうした調査研究と資料公開ののち、2006年にサリエを含むアルル基礎自治体の助成により、農耕地と化したキャンプ跡地に慰霊碑（写真2）が建てられ、政治家や各種関連団体（在アルル・レジスタンス・強制収容博物館など）による献花が始まった。正確には、慰霊碑は、国道を挟みキャンプ跡地と向かいあう土地に建てられた。それは土地の現所有者の許諾が得られなかったゆえの措置で、代わりに、本来のキャンプ跡地には膝くらいの高さの記念碑が設置されている（写真3）。そしてこれら慰霊碑・記念碑建設に続いて、2015年5月には追悼式典が開かれた。開催を呼びかけたのは、2014年に創設され、ジプシーが代表と副代表を務めるアソシアション（非営利市民団体）「サリエ・キャンプ収容者の息子と娘たち」（Association des fils et filles des internés du camp de Saliers 以下、AFFICS）である。



写真2 慰霊碑 (2015年5月筆者撮影) 地元アルルの彫刻家(非ジプシー)作成。パネルには、「サリエ・ジプシー・キャンプ 1942年6月-1944年8月 ヴィシー体制下、ここに700人のノマドが収容された」と刻印



写真3 キャンプ跡地の風景と記念碑 (2015年5月筆者撮影) 「旧サリエ強制収容所入り口」と刻印



写真4 追悼式典の様子（2015年5月筆者撮影） 追悼の言葉を述べるアルル市副市長

表1 当日の式次第(配布された式典案内文書にもとづき筆者作成)

1. 開式のあいさつ
2. 歴史の解説、詩の朗読
3. 犠牲者追悼
4. 遺族証言
5. 花束贈呈
7. 〈死者たちに〉
8. 黙祷
9. ジプシー民族歌「ジェレム・ジェレム」演奏
10. フランス国歌「ラ・マルセイエーズ」演奏
11. 感謝の言葉
12. 閉式のあいさつ

257



写真5 慰霊碑の前に掲げられた旗（2015年5月筆者撮影）
中央で男性が掲げる旗がロマの国際的な民族旗、左手フランス国旗の裏にもロマ民族旗が貼付

地元アルル市が配布した案内書によると、式典は「サリエ・キャンプに収容されたジプシーのための追悼式典」と称された。当日は、アルル市副市長や在アルル・レジスタンス・強制収容博物館役員、AFFICS 代表者の追悼の言葉に加え、元収容者遺族による慰霊碑への献花や国際的な「ロマ」民族歌ならびにフランス国歌の演奏が行われた（写真4、表1）。また、慰霊碑の前に「ロマ」民族旗とフランス国旗が裏表に重ねあわされた旗が掲げられていたことにも象徴されるように（写真5）、式典では、フランスという国家においてジプシーが隔離収容され、絶望的な環境下で命を落としていった出来事をフランスの歴史のなかに位置づけるための様々な集合表象が見られた。「私たちは決して忘れない（*Ma bister*）」¹⁵。これは、慰霊碑横の概説パネルに記されたロマネスの言葉である。慰霊碑建造と式典開催といったサリエ・キャンプをめぐるコメモラシオンは、〈忘れ去られていた〉記憶を現在において〈想起されるべきもの〉に変えていくための試みであった。

3-3 追悼式典における代表＝代理の物語り

現在、サリエ同様の追悼式典がほぼ同じ活動団体と諸個人（AFFICS 関係者およびその協働団体）によって各地で行われている。追悼式典に、大統領をはじめとする公人が参加することは、ノマド強制収容に対する公的承認の獲得という点、また一般社会では周知されていないこの出来事を広く伝えるという点においても意義があったと思われる。

さらに、このコメモラシオンは単なる過去の迫害の告発にとどまらず、ジプシーをとりまく現在の具体的な政治にも影響を与えるものとなった。オランダ大統領は先のメヌ＝エ＝ロワール県の追悼式典で強制収容政策を公式に謝罪した際、その同じ演説のなかで、現行の差別的制度に言及し、それを定めた1969年法の廃止を約束した。1-3で触れたが、この法律は、移動生活者に「移動手帳」という特別の国内通行証を携帯し、定期的に警察や役所で査証を受けることや、「定着自治体（commune de rattachement）」という特別の住民登録を義務づけるものである。これら移動生活者にだけ課される特別の手帳と自治体登録制度を定めた法律の撤廃が、大統領の約束通り、同年末に国民議会で可決された¹⁶。

このように活動家のコメモラシオン運動は、現在の政治と切り離すことのできない過去表象となった。しかしその一方で、ジプシー／移動生活者支援団体関係者からの情報によると、この種の追悼式典開催に対しては批判もあるという。なぜなら、フィロルをはじめとする歴史家も認めるように、当時ノマド・キャンプに収容された人のなかには、警察が収容にやってくるまで、自らをジプシーやノマドであると考えていなかった個人も含ま

15 ロマネスは本来文字をもたず現在でも筆記されることが一般的ではないので、統一された筆記法があるとはいえないが、通常「忘れない」「忘れるな」という場合の表記は *Na bister* である。以下に記す活動家のインターネットサイト（たとえば4-1の文章）でも、*Na bister* と記される。

16 移動手帳の携帯・査証の義務に違反した場合、投獄や罰金刑が科され、定着自治体の登録は、自治体の首長の許可なしには認められず、さらに選挙権の行使という点でも特別な制限が課せられた。こうした1969年法にもとづく諸制度は、「市民の平等」という共和国理念に反する差別的措置を含むため、これまでに多くの批判を受けてきた。そしてようやく、法制定から約半世紀を経た2016年12月22日の国民議会で、「移動生活者に対する歴史的な差別の終焉」として1969年法撤廃を盛り込んだ「〈平等と市民権〉に関する政府法案」が可決された〔住宅・持続的居住省ウェブサイトより〕。

れ、追悼式典ではそうした人々——「ロマ」や「ジプシー」の国際的な民族歌と民族旗で表現されたエスニックな集団性には親和性をもたない人々の存在は看過されるためである。

「ジプシー」をめぐる法政策を分析した別稿〔左地 2016〕で詳述されるように、「ノマド」や「移動生活者」とは、「ジプシー」と呼ばれてきた人々の監視・隔離等を目的として、20世紀初頭から現代に至るまでのフランスの諸政策が作り上げていった法的・社会的なカテゴリーである。フランスの法政策は、ジプシーと呼ばれる人々を歴史的かつ現実的な具体性を捨象したカテゴリーで表現することで、彼らを社会的・法的身分や生活様式ではなく（フランス国民であるか外国人であるか、移動の生活様式をもつ人々であるか移民であるかにかかわらず）、架空の民族性により定義される「内なる他者」に変換してきた。そこでは生活様式も出自も異なるジプシーやノマドやロマの諸個人が、排除すべき「共和国の他者」として一括され、「ジプシーなるもの」という架空の民族表象を押しつけられてきた。

したがって、現在のコメモラシオン運動のなかで、「ジプシー」や「ノマド」というカテゴリーを無批判的に踏襲して用いたり、「ジプシー」と呼ばれ、自らそのように自称する人々を、あるいは自らをジプシーやノマドであるとみなしていなかった人々までもを、「ノマド」、もしくはその「ノマド」と同一視された「ジプシー」や「ロマ」という抽象的なカテゴリーのなかに安易に統合したりすることは、再びジプシーやノマドとして一括され他者化されてきた人々の生きる歴史的かつ現実的な具体性を背後に追いやる危険性を孕む。つまり、特定の個人を「よそ者」として集合化するために権力が編みだした言説をそのまま受け継いで「ジプシーの歴史」を表象し物語化することは、従来のスティグマを正当化し、永続化しかねない。このような表象の政治が危惧されているといえるだろう¹⁷。

以上のように、追悼式典の開催というコメモラシオンの場では、非ジプシーの他者に向けて、そのまなざしや権力関係を介した「ジプシーの歴史」と抽象的な集団性が呈示された。慰霊碑・記念碑やロマ民族旗・フランス国旗といった様々な「想起の媒体」と集団表象の装置を通して、個々の犠牲者の具体的な声や姿は背景に追いやられ、非ジプシーとジプシーという二集団の関係が前面にだされ、過去が表象され活用されたとも指摘することができる。代表＝代理の物語りを展開することで、活動家は、これまで忘却の淵に立たされていた家族や仲間の過去を想起されるべき記憶に変え、現在の政治にも影響を与えてきた。しかし反面、その集団的過去の表象＝物語化は、ジプシーやノマドと呼ばれた諸個人が別様に体験したかもしれない多様で具体的な出来事を忘却し歪曲する可能性を孕むので

17 コメモラシオン運動に対するジプシーやノマドと呼ばれる（またジプシーや移動生活者と自称する）一般の人々の反応については、メディア報道や学術調査でも報告されていないので、不明なところが多い。ただし、インターネットや新聞という文字媒体に慣れ親しんでいない人々が多いことから、運動自体が周知されていない可能性はある。ポーのマヌーシュに関しては、筆者から話を聞くまでコメモラシオン運動について知らなかった人が圧倒的に多い。迫害の告発という点でコメモラシオン運動をある程度評価する人もいるが、その詳細を調べ、活動に参加しようという人はいないのが現状である。

ある。

この点において、フランスのジプシーのあいだに見られる二種の記憶行為——活動家のコメモラシオン運動とマヌーシュの沈黙のあいだには断絶があるように思われる。ポーのマヌーシュは、「私たちは何百年も前からこのように迫害されてきた」「同じことは戦争中にもあった」という言葉を会話のなかに挟み、過去を語る。彼らは、こうした具体性を欠く婉曲的な語りを通して過去を集団的に想起、伝承する一方で、他者の代表＝代理の物語りとしての集合的想起と伝承を避ける。そこでは、過去をめぐる暗示的で断片的な物語が紡ぎだされるが、それは、個々の人間の唯一無二の体験を集団の歴史として物語り、伝えることはしない。犠牲者の多くは自ら語れず、生き残った人もその事実を他者に伝えるためには、各々の個人的な体験を死者の記憶と共に「代表して物語る」局面が生じる。これは、死者の記憶を受け継ぐ人にとっても同じで、死者を「代理して物語る」局面は避けられない。この意味での代表＝代理の物語りを、マヌーシュは避ける。対して、活動家が先導してきた迫害の告発やその記憶の伝承に向けたコメモラシオンは、ジプシーやノマドという集団表象のもとで犠牲となった個々の人間の声や顔や具体的な体験を「ジプシーの歴史」として集合的な記憶のなかに回収し、代表＝代理して物語る、あるいは語りなおす手続きをとる。

以上、本章では、追悼式典の事例を通して活動家のコメモラシオン運動における記憶行為の特徴を検討してきた。1-3で述べたように、活動家は、ジタンやマヌーシュなど出自も生活様式も様々であるものの、ある程度読み書きを行い、ある程度まで社会文化的に同化し、多数派社会のなかでオーディビリティと政治的な力をもつ人々である。コメモラシオン運動は、こうした特定の人々が行う集団的過去の表象＝物語化であり、ポー地域のマヌーシュをはじめとする市井のジプシーには共有不可能な記憶行為であるように見える。

しかし、さらに活動家によるコメモラシオン運動の内容を追うことにより、こうした対立図式に安易に還元することのできない別の側面も浮き彫りになる。それが、インターネット上でのキャンプ元収容者に関わる行政や警察組織による記録書類の公開、つまり公的アーカイブの開示という活動である。

4 露呈されるアーカイブ、個別特異な生

4-1 インターネットにおけるアーカイブ開示——コメモラシオン運動の第二の側面

2018年1月現在、二つのサイトが活動家により運営されている。一つは、2014年に開設された「サリエ・キャンプ1942 - 1944——受け継がれる一つの記憶」、もう一つは2016年から運営されている「フランス・ノマド・メモリアル」である。両方とも、AFFICS関係者とその協力者（ジプシーや移動生活者と自称する人たち）が作成と運営に関わり、フランス各地で開催される追悼式典の告知や報告もここで行われている。

「フランス・ノマド・メモリアル」には、サイトを立ち上げた活動家自身の言葉として、次の文章が挙げられている。

ここは記憶の場 (*lieu de mémoire*)、内省と交換と共有 (*partage*) の場です。この歴史が、ヨーロッパによってそうされたように、フランスによって公式に承認されるため。彼らの名が忘れ去られないため。暗黒の恐怖が再び訪れないため。

忘れるな！ (*Na bister* ロマネス)

忘れるな！ (*N'oublions pas* 仏語)

本章では、この「記憶の場」が、誰の記憶をどのように共有 (*partage* = 分有) するかという点を探る。まずは、ここで公開される記憶媒体の内容から見ていきたい。

「サリエ・キャンプ 1942 - 1944」と「フランス・ノマド・メモリアル」は、掲載される資料はやや異なるものの、ほぼ同様の形式をとっている。次のような順序で、フランスのノマド・キャンプに収容された個人一人ひとりの情報が一つのページに収められるのが、その特徴である。ページ内では、まず元収容者の氏名と生年・死亡年が挙げられ、当人の人体測定手帳が残されている場合は、その写真が掲載される。そして写真に続き、次のような情報が列挙される。生年月日、出生地、当人の父母の氏名と職業 (たとえば、曲芸師や巡廻柳細工師)。当人の結婚した年。妻子の氏名と生年。国籍 (フランス国籍やその他の国籍)、当人の職業。以上の情報に加え、出典資料から引用して「人種：ノマド」や「カトリック教徒」という情報が記されている人もいる。また、次のように、死亡した状況が具体的に記されている人もいる。「1942年9月28日、リヴザルト (Rivesaltes) キャンプに収容。同年11月17日、脱走。1943年5月18日、サリエ・ノマド・キャンプに収容。同年9月4日、アルル病院に搬送。死亡届 564号：慈善病院にて死亡、52歳」。

以上の手順で、最初に元収容者一人ひとりの情報がアーカイヴにもとづいて可能な限り詳らかにされる。そしてその後が続くのは、これらの情報元となる様々な種類のアーカイヴ画像である。「記憶の場」に登場するこれら記憶媒体は、主に以下のものである。

- 「人体測定手帳」
- ノマド収容に関する警察や行政の報告資料、収容所入所記録資料
- 出生届・死亡届

この他、元収容者が収容されていたキャンプの写真やその人物が生まれたり暮らしたりしていた町や村の当時の風景写真や絵が差し込まれることもある。そしてある個人の資料提示がすべて終わると、末尾に、「彼／彼女の名前を忘れるな！」「忘れるな！」という仏語やロマネスの言葉が挙げられ、その次に別の人物の個人資料のページが続く。

元収容者の個人情報をもっと詳細に伝える資料は、人体測定手帳である。1-3で述べたように、この手帳は、警視庁のベルティヨンが犯罪者の身元確定と追跡のために編みだした人体測定法にのっとり、指紋以外に身体細部の情報を網羅的に記述している。「ベルティヨン方式」とも呼ばれたこの市民管理技術について論じた渡辺公三の研究によると、身体計測により犯罪者の身元 = 同一性を確定し追跡する技法は、「華々しい身体刑」による処罰の時代から、「表象に関する一つの技術論全体に根拠をおいた」規律・訓練の時代へと移行するさなかにあった [フーコー 1977]、19世紀後半の警察機構が開発し、その後世界の警察へと波及していったものである [渡辺 2003: 32]。犯罪者は、それまでのように単

なる群れや種として把握されるのではなく、「ひとつの名をもち、かくかくの日付にかくかくの町に出生し、ある確定された日付にかくかくの犯罪をおかし、かくかくの刑を課された、ある見間違えようのない固有の顔をもった」個体として、同定装置や制度のなかで分類可能で言表化可能な身体の部位とその特徴にまで細分化されて記述され、法のシステムのしかるべき場所に登録＝刻印され、法の参照項として召喚しうる存在とならなければならないと考えられるようになったのだ〔渡辺 2003: 33, 52〕。

このように犯罪者と同様の方法でノマドの身元＝^{アイデンティティ}同一性を身体の部位にまで遡って記載し確定した書類である人体測定手帳が、「サリエ・キャンプ 1942 - 1944」と「フランス・ノマド・メモリアル」では重要なアーカイヴとして活用される。写真 1 の人体測定手帳画像はすべて、筆者が南仏ヴォクリューズ県立文書館にて撮影したものであるが、同種の人体測定手帳がフランス各地の文書館に保存されており、活動家がインターネット上に掲載する資料も同様の人体測定手帳画像である。また上記のように、人体測定手帳以外の元収容者個人記録として、彼らがいつどのような状態で拘束され（ノマド収容に関する警察や行政の報告資料）、いつどの収容所に送られたのか（収容所入所記録資料）、どのように命を落としたのか（死亡報告書類や死亡届）を伝える文書が数多く挙げられている。

以上のように、二つのサイト上には様々なアーカイヴ画像＝イメージが充溢するのだが、ここでさらに注目したいのは、これらの「記憶の場」には、収容者や家族によって撮影された写真や本人たちの証言は掲載されないという点である。また、活動家自身による言葉も、上に挙げた「ここは記憶の場…」から始まる文章、そして伝説やロマネスでの「忘れるな！」という言葉のみである。つまり、これらのサイトの最たる特徴は、非ジプシーにより作成、収集、保存、再発見された諸個人の公的なアーカイヴが画像として次々に羅列され、それらのイメージの呈示の一方で、本人や他者による証言や歴史家や活動家の解説といったナラティブ（物語り）は最小限に抑えられているということである。

先に挙げた活動家の言葉を見る限り、この「記憶の場」も追悼式典と同じくジプシー強制収容をめぐる記憶の公的な承認を目指し、立ち上げられたと考えることができる。行政や警察組織という権力者の側の道具であったアーカイヴを公開することで、当時の人々が被った暴力のありようを暴露することもその目的であったに違いない。またここには、追悼式典と同様に、集団的過去の表象にもとづく物語化のプロセスを見てとることもできる。フランス各地の文書館にて本来は別々のカテゴリー（ノマド・カテゴリーやポリス・カテゴリー等）に収められていた公的アーカイヴが繋ぎあわされ、様々な歴史的イメージ（当時の人々や風景の写真）が合間に差し込まれて、元収容者の個人の軌跡が可能な限り辿られ、再構成される。そしてそれら個々人の生の痕跡は、ノマド強制収容という一つの出来事にそって同じ「記憶の場」に並べられ、集団の物語を共同で紡ぐ。

しかし、次に挙げるように、この「記憶の場」には、「ジプシーの歴史」を物語る追悼式典とは異なる記憶の共有＝分有の体験を促す側面もあるように思われる。そこでは、一つの集団の過去として見通すことのできる「全体」へと容易に回収されない、様々な個人の生の断片や痕跡がアーカイヴを通して浮き彫りにされているためだ。たとえば、人体測定手帳写真に押されたスタンプの日付から撮影当時 17 歳であったことが推測できるある

女性について、彼女の公的アーカイヴはそのまだ幼さの残る顔写真と共に次の情報を呈示する。

マリー・シャルル

1921年1月26日、ムーランに出生。アンリ・シャルルとロザリー・シャッツの娘。フランス人。無職。ノマド個人人体測定手帳番号第76906号。

1941年7月11日、在ムテの住宅割り当て（＝強制定住 筆者注）。

1943年10月16日、サリエ・キャンプ収容。収容バラック4、カテゴリー番号J3。

1943年10月30日、息子ジョセフ・シャルルと共に入院、その後1943年11月19日、1943年12月31日、入院。

1944年1月22日、キャンプに戻る。1944年8月18日、脱走。

サイト上には、この女性のように、キャンプを脱走した後、行方の辿れない人々の情報が多く残されている。また、人体測定手帳が発見されていないかその他の理由で顔写真のない人、さらに、個人情報の記述は数行にとどまり、個人ページ全体が当時のキャンプや町の風景の画像で埋め尽くされている人も含まれる。これらの人々は、何らかの方法でノマド・キャンプ元収容者であると判明したものの、収容の事実に関する詳細なアーカイヴを欠くため、わずかに垣間見えるその生の軌跡が呈示されていると考えることができる。

キャンプ収容中、ないしは収容所から近隣の医療施設に移送された後に、当人が死亡した事実を伝える書類（死亡届、医療施設記録）など、きわめて断片的なアーカイヴしかもたない人がサイト上にたくさん登場する。ある赤ん坊については、キャンプで生まれ、収容中の生後7ヶ月に亡くなったことを記載した書類のみが、ある男性に関しては、用紙の一部を手でちぎったメモに、氏名と死亡年月日、記録者サインだけが残されている。ある女性については、氏名と収容バラック番号が記載され、残りは空欄の収容者個人登録カードに、「1943年6月19日10時半サリエ・キャンプにて死亡」と斜め書きされているのみである。これらの個人は、強制収容という出来事を通してその名前と死が記録され、その情報しか残されず、しかしそれゆえにその存在が現在において想起される人たちである。

4-2 「記録と想起の媒体」としてのアーカイヴが紡ぐ「記憶の場」

以上が、活動家がインターネット上に立ち上げる「記憶の場」の概要である。ここでは、ジプシーやノマドという集団の歴史＝物語（histoire）にそって個人の生を再構成する物語化のプロセスが見てとれるが、他方で、証言やモニュメントではなく個人アーカイヴ、ナラティブではなくイメージの呈示という記憶の開示方法から促される物語解体のプロセスも浮上する。強制収容という出来事にそって諸個人は同じ「記憶の場」に並べられるが、活動家が開示する個人アーカイヴという「記録と想起の媒体」は、一つの集団の過去として見通すことのできる全体やその統一的な物語を解体する、「泥臭いまでに物質的で、やっかいなまでに断片的な」[フォスター 2016: 33] 性質をもっている。この性質が、慰霊碑等の「想起の媒体」を用いた追悼式典とは別種の効果を「記憶の場」に及ぼし

ている。

このようなアーカイヴ＝イメージの力が働く様態を探るため、ここでいくつかの先行研究を参照したい。まず、物語解体的に働くアーカイヴという側面については、フランスの美術史家ジョルジュ・ディディ＝ユベルマンのイメージをめぐる著作『イメージ、それでもなお (*Images, malgré tout*)』が理解の手がかりを与えてくれる。「イメージは決して、すべてが見えるようになるなどはない。むしろイメージは、それがわれわれに絶えず呈示する、すべてが見えるわけではないことをきっかけに、不在を示すことができるのだ」[ディディ＝ユベルマン 2006: 161 強調原文]。アウシュヴィッツ第二強制収容所でひそかに撮影され、もちだされた4枚の写真の展示をめぐって、ホロコーストの表象を拒否する映画『ショア』の監督クロード・ランズマンらの批判を受けた際、ディディ＝ユベルマンはこう反論した。ここで彼は、写真というイメージが表象を完全に遂行することなく、つまり「すべてに抗して (*malgré tout*)」常に断片的で欠落を孕むがゆえに、それらのイメージを見る現代の人間に想像することを倫理的な責務として課すのだと主張する。彼のいう「想像」とは、恣意的な連想や解釈ではない。イメージがその物質的痕跡から呈示する情報を他に残された資料を参照しつつ徹底的に検証し、問い続けるという歴史学的営みである。

全体的な表象＝物語化に抗い、不在や欠如を露呈するイメージとしてのアーカイヴ、そして「問い」と「想像」をもたらし、見る者に主客関係を越えた相互作用や共同性を促すその作用については、ユダヤ人の「ポストメモリー」を論じた歴史家マリアヌ・ハーシュ [Hirsch 2012] や、現代芸術における「アーカイヴ的衝動」を指摘した批評家ハル・フォスター [2016] も強調する。さらに、ディディ＝ユベルマンの別の著作『露呈される人々、現れ出る人々 (*Peuples exposés, peuples figurants*)」[Didi-Huberman 2012] は、共同性の露呈という視点から現代芸術を分析した菅香子 [2017] の論考(後述)とあわせて、物語解体的に働くアーカイヴのもとに生起する共同性を捉えるうえで示唆的である。

「終わりなき共同性の探求」としてイメージを論じたこの著作の一つの章で、ディディ＝ユベルマンは、ナンシーやモーリス・ブランショ、ロベルト・エスポジトの共同体論を参照しながら、1871年にアドルフ・ウジェーヌ・ディデリが撮影した1枚のイメージーパリ・コミュンで政府軍により殺された12人の死体が映しだされた写真を次のように分析した。12人の死体は、パリ・コミュンという出来事によって偶然に隣り合った棺に並べられ、ディデリの署名付きの写真に収められた。そこで「死体は触れ触れられ、まさに共同体を形成している」。しかし「共に同じ理由で銃殺され、死によって結びつき」ながらも、それらの人間は一人ひとり棺に収められ＝枠づけられてもいる。つまり、12人の死体は、「集団や区別されないまとまりとしてではなく、一人ひとり数えられるものとして、死によって隔てられ」、しかし、その死という隔たりによって結びつくものとして集合的に呈示されるのである [Didi-Huberman 2012: 104 強調筆者]。

1-2で触れたように、この人々が隔たりつつ繋がる事態をナンシーは「分有」と呼んだ。その分有の共同体とは、生産や活動のための企てでもなく、共通の目的や根源をもって個を全体的統一のなかに融合させるものでもなく、個の有限性を補うことなく曝しだす

ことで立ち現れる [ナンシー 2001: 53]。ディディ＝ユベルマンがディデリのイメージのなかに露呈されているとするもの、そしてさらに、菅が現代芸術作品に見てとるものも、主体や表象の限界において体験される分有＝有限性の露呈としての共同性である。「現代の芸術作品が露呈しているものは、表象されえないものである。表象されえず、まさに呈示されるよりほかないものが、呈示されている。表象しえないものとは、見えない記憶であったり、何か起きて消えていくという出来事であったり、存在の痕跡であったりする。つまり、何かに置き換えることが不可能なものだ。そういった表象不可能なものを現代の芸術作品がさらし出す」 [菅 2017: 207-208]。菅はこう述べ、名前も所属も持たない人々や何らかの属性を共有しない人々の「顔」を集散的に羅列したり、雨風による絶え間ない変化や人の目に無防備にさらされた物質的な作品を生みだしている現代芸術の潮流のなかに、「表象・代表したり、表象・代表されたりする主体」の枠組みから解き放たれ、「剥き出しの生」(ジョルジョ・アガンベン)としてさらされる人間の共同性 [菅 2017: 182] の現れを感知する。

筆者もまた、この「分有」としての共同性が生起する場面を、マヌーシュの沈黙の事例のなかで指摘したことがある [左地 2014、2017a]。マヌーシュにおいて、この分有という事態は、人々が沈黙を通して死者の特異な生の痕跡を保護しようとするときに生じる。名前や思い出など、個別特異で代替不可能な存在者としての死者に関わる事物・事象は、一見すると個人を他者から分かつ(差異化する)ものである。しかしそれらは同時に、他者から独立して個人に内在しその内に完結するものではなく、他者によって見いだされ保障されるという特徴をもつ。たとえば、死後に口にだされることが禁じられるマヌーシュの名前は、「個人に固有の」所有物でありながら、自らが選択し意のままにできるものでもなく、周囲の他者の命名や呼びかけによって個人に与えられ、他者を通してその個別特異性が保障される。同様に、ある人の生の記憶、さらに自らに訪れる死も、誰によっても代表＝代理されえない「個人に固有の」ものでありながら、自らのうちで完結されることはなく、他者との関係のなかで生みだされ、他者によって承認され保護される。すなわち、個人を他者から分かつベクトルそのものが他者の存在を要請あるいは前提とし、それにより支えられている。このようにマヌーシュの沈黙は、個と他がそれぞれの特異性や差異の露呈において互いの存在を分有する出来事としての共同性を開示する。それは、一つの共通の本質のもとに個を他と同一化させることも、死者を祖先という集団的全体に滑らかに溶解させることもない、ゆえに集団の永続性や秩序の維持とは関わりをもたない「無為の」共同性である。

以上、アーカイヴ＝イメージの力が働く様態とそこで創出される共同性に関する議論を検討してきた。ディデリの写真、現代芸術作品、マヌーシュの沈黙の場面では、表象や主体の限界にさらされた人間の存在形態が現れ出る。そしてそこに、「決定的な分離と無媒介的な分かち合い」としての「分有」の共同性が生起する。

フランスのジプシーの活動家がインターネット上の「記憶の場」に開示するアーカイヴもまた、活動家の意図の如何にかかわらず、「すべてに抗する」イメージの力を通して、このような隔たりつつ繋がる出来事としての共同性を誘発するといえないだろうか。そこ

で次に、この「記憶の場」がアーカイヴという「想起の媒体」を通して、誰のどのような記憶をどのような人々のあいだで分有することを促すのかという問題を考察したい。

先にその一部を紹介したように、サイト上ではノマド・キャンプに収容されたとされる個人一人ひとりのアーカイヴが集合的に羅列される。これらの人々は、集合的・断片的に呈示されるアーカイヴを通して「記憶の場」に姿を現し、ノマド強制収容という歴史／物語を共同で構築する。彼らは、強制収容という一つの出来事によって偶然的に結びついて同じ物語のなかに並べられる。アルフェンが指摘していたように、当時の政府や警察組織が行っていた記録と分類の実践の「再演」を通して、犠牲者は再びアーカイヴ化・カテゴリー化という暴力にさらされるともいえる。しかし、これらの集合的に羅列される登場人物は、同時に、「集団や区別されないまとまりとしてではなく、一人ひとり数えられるものとして」隔たってもいる。同じキャンプ、あるいはフランスのノマド・キャンプに収容されたという事実以外には、年齢も性別も出自も辿った人生も異なる人々が同じ物語のなかに無言のままランダムに連なりながらも、その生の個別特異性を露わにしている。発見された豊富な資料により詳細に語られる人生、数行の文章に要約された人生、不意に途切れた人生、キャンプから解放され生き延びることのできた人生、収容所で誕生し失われた人生といった、多様に彩られた生の軌跡を浮上させ、その個別特異性を露呈するのは、欠落や断片を孕み、ときに破れてしまっていたり文字が判読不可能であったりするアーカイヴである。

ある個人の属性を身体の細部にまで遡って詳らかに記録する媒体として当時用いられていたアーカイヴが、現代において個人の個別特異な生の軌跡を想起させる媒体として別様のかたちで現れ出ているということが出来る。ナラティブではなくイメージを羅列するというサイトを構成する基本的な特徴が、元収容者とされた個人一人ひとりのアーカイヴ、そしてそれが露呈する各々の生の軌跡にとどまることを否応なく差し迫るともいえる。断片的で物質的なアーカイヴがさらしだす多様で各々に特異な人々の生を何らかの類似性や共通性のもとに統合するナラティブは、ここには登場しない。したがって、その「記憶の場」に登場する人々は、強制収容という一つの出来事において結びつきつつも、各々のアーカイヴが露呈する個別特異な生の痕跡において隔たったままで、諸個人のアーカイヴを加算して再構成された何らかの集団的過去の全体や実体としての共同体を構築することはない。このような個を他から区切ると同時に他へと繋げる分有の体験を促すアーカイヴが、「すべてに抗して」、「ジプシーの歴史」という代表＝代理の物語に裂け目を入れながら、出来事の当事者たちを互いに結びつけている。

さらにディディ＝ユベルマンや菅も指摘するように、こうした特異性や差異の露呈のもとに生起する共同性は、「出来事の当事者たち」のあいだのみならず、まなざしの共有 [Didi-Huberman 2012: 100-104; 菅 2017: 187-192, 200-202] を通して、「出来事の当事者たち」と「それを見る人たち」とのあいだにも生起する。それは、ミシェル・フーコーがそのアーカイヴ論で述べたような、「無名の人々」の生の痕跡が「権力という光と一瞬交錯する」、アーカイヴ的暴力と衝突することにより照らしだされる、見る人・記憶共同体へと届けられるという事態のなかに生起する共同性だともいえる。「権力との衝突がなけ

れば、おそらくそれらの束の間の奇跡を呼び起こす如何なる言葉も書かれることはなかったに違いない」「一度も語られることなく消え去っていくことを運命づけられていたこれらの生は、権力とのこの一瞬の接触点においてのみ、(中略) その痕跡を残すことが可能になったのだ」[フーコー 2006: 209-210]。「汚辱に塗れた」無名の人々についての古文書(監禁命令封印書や王への嘆願書)をめぐって、フーコーはこう述べ、そのアーカイヴに現れた「生の余剰」や「強度」をそのまま残すため、歴史書ではなくアンソロジーを編むことにしたという。

このフーコーを魅了した「汚辱に塗れた人々」のアーカイヴと同様に、インターネット上の「記憶の場」は、「ジプシー」と総称される以外には「歴史」にその名を刻むことのない人々の「生のアンソロジー」のように見える。そこには、「数行、或いは数頁の人生、一掴みの言葉に要約された数知れない不幸や冒険。束の間の生、偶然書物や公文書に遭遇した人生。生のある例証」[フーコー 2006: 202 強調原文]と呼ぶべき生の痕跡が、歴史的背景を語る言葉や証言といったナラティヴを介することなく、アーカイヴが露呈するそのままのかたちで出現する。そうして、権力が記録しさえしなければ「消え去っていくことを運命づけられていた」これらの無名の人々の姿が、その「石のように滑らかな言葉の元に感じ取れる」「生の余剰」[フーコー 2006: 204]を伴って、「出会う如何なる必然性もなかった」現代の不特定多数の私たちの眼前に「偶然的」に開示される[フーコー 2006: 213-214]。

インターネットサイトは、ジプシーと非ジプシーからなる匿名で多数の人々の共有空間であり、アーカイヴを見る人、それらが差し込まれる記憶共同体とは、非ジプシーを含めた不特定の他者である。これらの人々、特に非ジプシーの匿名の人々が「サリエ・キャンプ 1942 - 1944」や「フランス・ノマド・メモリアル」に開示されたアーカイヴに何を見るのかという問題に答えるための具体的な情報を筆者はもたない。確かに、人体測定手帳画像を見ると、人はその手帳を作成し管理していた当時の警官や行政官のまなざしを手に入れ、ときにその手帳をノマド強制収容という全体的な物語を再構成するための「証拠」として用いるかもしれない。しかし、様々な個人のアーカイヴで埋め尽くされたこの「記憶の場」において感受されるものは、単純に「記録の媒体」としてのアーカイヴ、権力の不正の歴史やその犠牲者であったジプシーやノマドの歴史という集合的過去の物語だけではないはずだ¹⁸。

アーカイヴを見るという行為は、歴史家アルレット・ファルジュ [Farge 1989] が「味わい」という言葉で表現するように、過去や個人の生の痕跡に直に触れるという感覚的な体験を特徴とする。そこには見る／見られるというまなざしの共有も生じ、アーカイヴのもとで触発されるその身体感覚は、ジプシーやノマドという集団の歴史／物語に回収され

18 ランズマンは、アウシュヴィッツを「再構成」したとして映画監督スティーブン・スピルバーグを批判し、同様の批判をディディ＝ユベルマンに投げかけた。この批判に対してディディ＝ユベルマンがランズマンに求めたのは、すべてのイメージ＝アルシーヴを証拠やフィクションやフェティシズム、つまり「表象」としてのイメージに還元してしまわないことである [ディディ＝ユベルマン 2006: 120-132]。

ない具体的な個々の生の揺動を感受させるものである。そしてその感受は、ヴァルター・ベンヤミンの「歴史をさかなでする」[ベンヤミン 1994: 334] 身振りに繋がり、ノマドやジプシーとしてカテゴリー化された個人をめぐる問いや想像を促すかもしれない。無名の個人の生の軌跡や「沈黙した声」を「ひそかな索引」として [ベンヤミン 1994: 328]、滑らかに織りあげられた歴史の襞に分け入る身振りを通して、集団的な物語や均質なカテゴリーによって説明されえないもの、すなわち、個別特異性に彩られた生をめぐる問いと想像——「この女性は幼子を連れてどこに行ったのだろうか」「この男性はどのように生きながらえたのだろうか」「この赤ん坊の母はどこにいるのだろうか」「この男性は本当にノマドやジプシーと呼ばれる人であったのだろうか」——が生じてくるかもしれない。この女性、この赤ん坊、この男性をめぐる問いと想像は、個別特異であるがゆえに、ジプシーであるか否かを問わず、どこか似ている、普遍的な生を生きたはずの人々の姿を喚起するかもしれない。

こうした「想起の媒体」としてのアーカイヴとの接触やそこに生じる問いや想像を通して、見る人は、現在において再構成されえないその物語の主人公の不在を受けとる。ナンシーが論じていたように、この不在という隔たりによって、アーカイヴに痕跡を運ばれた無名の人と、そのアーカイヴを見る匿名の人とのあいだに共同性は生起する。イメージ＝アーカイヴを受けとることを通して、すでに人はまなざしの分有にさらされ [Didi-Huberman 2012: 102]、想像する義務と責任を負う。この同一性なき共同体のもとに生じる義務や責任¹⁹は、追悼式典とは異なる方法で物語化に抗する「喪の作業」を導くだろう。

ここでボルタンスキーのアーカイヴァル・アートをめぐって田中が指摘した、ホロコースト効果と服喪、ナンバリングとカウンティングというアーカイヴの二つの実践について振り返っておきたい。二つの効果が、活動家のインターネット上の「記憶の場」に現れているといえないだろうか。この「記憶の場」の特徴は、それが証言や回想記とは異なり、他者・権力による記録としての公的文書（アーカイヴ）から構成されているという点、当事者・権力者・活動家・歴史家などの数々のナラティブではなく、そのアーカイヴ＝イメージの徹底的な羅列にあった。確かに、「記録の媒体」としてのアーカイヴは、人体測定手帳により制度のなかに絡みとられ、ノマドやジプシーとしてナンバリングされた人々の姿と彼らに向けられていた当時のまなざしを現在に再現する。そしてその手帳をはじめとする痕跡は、一つの集団的過去の物語を再構築するための証拠、数、リストとしても用いられる可能性がある。ここでは個人の生は大きな物語のなかに消失していきかねない。

19 ディディ＝ユベルマンがナンシーと共に参照するエスポジトは、ラテン語で共同体を意味する「コムニタス (cummunitas)」の語源に遡ることで、ナンシーの議論を贈与と義務の共同体という視点から深化させた人物である。そこでは、コムニタスが、「共に (cum)」に伴われて「義務」や「責任」や「贈り物」という意味をもつ「ムヌス (munus)」を内包すること、そして、「免疫」という概念をもつ「イムニタス (immunitas)」が、コムニタスと同じ「ムヌス」を挟んでその否定、つまり義務の免除を示すことが重要となる。つまり、エスポジトによると、共同体とは、贈与と贈与がもたらす負担＝リスク、義務、責任を要件として、その緊張関係のなかで成立するものである [エスポジト 2009]。

しかしそうしたアーカイヴ的暴力の一方で、一人ひとりが一つのページを構成し、そして集合的に羅列されていくそのプロセスのなかでは、それらのアーカイヴは個人の生の軌跡を想起させる媒体となる。それを見る人は、ナンバリングという暴力のなかでかき消されてしまった個人一人ひとりの顔や名前、その生の断片を照らす様々な痕跡に触れ、触れられもする。

このアーカイヴの表象と物語に抗う力、そして分有という共同性の体験が、追悼式典開催とアーカイヴ開示活動という、同じジプシー活動家が行う二つの記憶行為を決定的に異なる性格のものにするといえる。つまり、様々な集合表象と「想起の媒体」を用いる追悼式典が、犠牲者一人ひとりの固有性の剥奪のもとに、他者のまなざしを引き受けた「ジプシー」という集団性を強調し、統一的な集団の物語と「表象の空間」を立ち上げるとするならば、個人の生の軌跡を想起させるアーカイヴが羅列されるサイトでは、「ジプシーの歴史」として集合化や表象が不可能な個人の特異な生がさざめくままにとどめられ、「哀悼の空間」が創出される。ここでは、「ジプシー」という民族的・歴史的に限定された集団性を超えた、個人（アーカイヴに痕跡を残した人）と個人（アーカイヴを見る現代の不特定多数の人）のあいだの「喪の作業」が生じる。この「記憶の場」は、現在や集団の視点から犠牲者の生を再構成し統合する物語りを成就しないため、集団的迫害の承認という政治的目標を効率的に導かないかもしれない。しかしそこでは、存在の有限性や受動性ゆえに他者に苦痛を露呈し、他者の苦痛を（そしてその生の彩りも）感受せざるをえない人間たちの「無為の」共同性が、ジプシーと非ジプシーの境界を超えて広がるかもしれないのである。

4-3 アーカイヴ＝他者／権力の道具を通して家族と再会する人々

ここまで本章では、活動家のアーカイヴ開示という行為が促す共同性について検討してきたが、一つの問いが残る。それは、他者／権力の道具としてのアーカイヴを通して亡き家族や仲間と再会する一般のジプシーの人々の体験とはどのようなものなのだろうか、というものだ。詳しくは別稿に譲るが、最後にこの点に触れておきたい。

活動家のホームページやブログは、インターネットという文字媒体を利用する人々を対象にするので、自ずと非ジプシーの読者の方が多くなる。しかし、サイト上では、行方の辿れない人物の情報提供を呼びかける言葉もある。また、活動家がSNS上で「フランス・ノマド・メモリアル」のサイトに挙げられた情報を共有した際には、コメント欄に「この女性の父は〇〇で（後略）」と文書画像に残された情報（判別しづらい筆記体など）を読み取り記述する返答、また「この〇〇へと向かった女性行商人について母が知っている。彼女は（後略）」という情報提供など、様々な反応がジプシーと思しき人々から寄せられる。

また、筆者が人体測定手帳の閲覧を目的にパリ警視庁文書館を訪問した際には、受付係の人物に「たいへん驚いた」と声をかけられたことがある。この種の資料調査には、通常は、遺族が亡き家族の情報を求めてやってくるからだという。実際に筆者の調査地でも、文書館に足を運び、自分の祖父の記録を見つけだした60代のマヌーシュがいた。彼は祖父の個人アーカイヴを通して、祖父が大道芸人としてスイス内を移動して暮らしていたこ

と、そして祖母が非ジプシーの定住民であったことを突き止めたのだと筆者に話してくれた。

このように、自ら記録を残さず、常に一方的に記録収集（アーカイヴ）される側であった人々、さらには他者により作成されたアーカイヴを自らの手元に保存することもなかった人々が、他者によって作成され保存されたアーカイヴを活用して、亡き家族や仲間の生を辿りなおす喪の作業を行う可能性がある。確かにこれまで述べてきたように、人体測定手帳は非ジプシーの他者が編みだした「記録の媒体」であり、警察や行政当局などの道具、身体の一部を計測し同一性を識別可能なまでに個体化することで個人をカテゴリー化し追跡する、そのような権力者側の道具であった。また、マヌーシュのように写真をはじめとする死者に関わるあらゆる事物・事象を集団的領域に開示することを拒む人々は、自らの亡き家族の写真がインターネット上に公開されることに戸惑いや怒りを覚えるかもしれない。

このような意味・機能を考慮すると、アーカイヴに対する人々の抵抗や困惑の感情を否定することは難しいだろう。しかしそうした反応とは別様の体験を、アーカイヴは触発する可能性をもつ。この点について、ドキュメンタリー映画『人体測定手帳の歴史 (Histoires du carnet anthropométrique)』²⁰が、以下のように示唆的な場面を映しだしている。

この映画では、人体測定手帳の歴史と照らしあわせて今日のジプシー／移動生活者の現状とが入れ替わり映しだされ、20世紀初頭から約100年にわたり続いてきたジプシー／移動生活者に対する差別的措置が詳らかにされる。しかし、ここで印象的な場面として挙げたいのは、人体測定手帳をめぐる歴史家と手帳保持者遺族の反応のコントラストである。映画は冒頭で、訪れた撮影隊に亡き父の人体測定手帳の写真を見せられた男性の様子を映す。そしてその後、歴史家が人体測定手帳をめぐる当時の議論や権力の問題について説明する場面に代わる。そして次に、また亡き家族の人体測定手帳の写真を眺める別の遺族、歴史家による人体測定手帳の解説場面が繰り返される。おそらくこの映画の趣旨は人体測定手帳の時代から現代に続く差別の告発であり、歴史家と遺族はそれを証言する役割を担っていたはずである。そして確かに、歴史家の語りは、人体測定手帳がどのような差別的なまなざしにより編みだされ、差別を再生産する抑圧的な機能をもっていたかを明示するものとなっている。しかしその一方で、亡き家族の人体測定手帳写真を目にした遺族の反応は、次のように権力の不正を告発する歴史家とは対照的である。

ある男性は、亡き父の写真を見て、当時の父を思いだしてふと楽しげに歌いだす。またある女性は涙ぐむ。幼い頃に定住生活へと移行したこの女性は、「私は自分が誰なのかわからなくなるの」とアイデンティティに関する問題を口にしていた。そこで、目の前に差しだされた亡き母の人体測定手帳写真を見て、涙を溢れさせるのだ。それは悲しみの涙ではない。彼女の横に座り祖母にあたる人物の写真と共に眺めている娘は、おそらくこの人体測定手帳の意味を知っているのだろう、「ひどいものだわ、だってそれは…」とためらいがちに述べる。しかし、娘に対して母は次のように語りかける。「たしかにひどい

20 2012年、Raphaël Pilloso 監督、L'Atelier Documentaire et TV Tours 制作。

もの。でも、私には心地よいものなのよ」。また、マヌーシュと思しき男性は、「私たちのところでは死者の写真は見ない」「それは神聖なもの」と述べながら、写真を手にとりてじっと見つめる。

このような遺族と歴史家の姿が映画では繰り返し交互に映しだされる。つまり、歴史家は権力の道具、「記録の媒体」として人体測定手帳を分析し語るのに対し、遺族はそうした権力者側の意味に還元されない感覚や情動という「生の余剰」[フーコー 2006]を通して写真に触れ、亡き家族を想起し、「喪の作業」を行う可能性²¹を指摘することができる。

5 まとめ

本稿では、死者について沈黙し、集合的想起を避けるマヌーシュ、そして追悼式典の開催や慰霊碑・記念碑建設、アーカイヴ開示という過去の表象と露呈を通して迫害を告発するジプシー活動家という二種の人々による様々な記憶行為について検討してきた。活動家のコメモラシオン運動は、一見すると、マヌーシュの記憶行為とは正反対である。とりわけ慰霊碑に代表される「想起の媒体」を用いた追悼式典は、ジプシーやノマドと呼ばれ強制収容所に送られた人々の具体的な声や顔や体験を捨象し、これらの人々を隔離、排除してきた権力者側のまなざしを受けた「ジプシー」という集団性とその物語を呈示するものであった。このような集団的過去の表象という点において、それは死者への敬意という観点から、代表＝代理の物語りを回避するマヌーシュが行う記憶行為とは明確に異なる。活動家とマヌーシュの記憶行為のあいだには、ある種の断絶が横たわることは否定できない。

しかし、コメモラシオン運動におけるもう一つの活動に着目することで、このような対立図式は揺らぐことになった。ここで着目したのは、活動家が用いるアーカイヴという「記録と想起の媒体」であり、それがもつ二つの異なる効果である。元収容者のアーカイヴを通して活動家が立ち上げる「記憶の場」には、個々の犠牲者の人生の断片を照らすアーカイヴが、代表＝代理の物語りを介することなく、ただ羅列されていた。追悼式典同様に、活動家はここでもやはり一つの集団的物語を提示し、その承認を求めていた。しかしこのプロセスのなかで逆説的に浮かび上がってきたのは、アーカイヴを活用する活動家の意図、それを生産し利用してきた権力者の側の意図、そうした人間

21 もちろん、この映画のみを事例として人体測定手帳に対する遺族の感情を一般化することはできない。この点を追究するためには今後より詳細な調査が必要となる。ただし、モノ化・カテゴリー化というアーカイヴの原則に抗う「再人間化」[Alphen 2014:247]を可能にするのは、遺族の一人ひとりの死者をめぐる個別具体的な記憶と情動であると考えられる。固有性を剥奪され個性化された身分管理写真が、遺族の前で、固有性を与えられ尊称的機能をもつ肖像写真として現れ出る [Sekula 1990; 渡辺 2003]、固有の存在として蘇るのだともいえる。ファルジュ [Farge 1989] は、歴史学者の仕事とは、アーカイヴの味わいに耽溺することからいったん離れ、特定の問いを立て、それに応じて資料や引用を取捨選択し、アーカイヴから歴史的な意味を発見することだと述べたが、人類学者の仕事はむしろ、アーカイヴの（政治的社会的）意味・機能に還元されない感覚や「意味の過剰」の現れ出る場面に徹底的にとどまることであるように思われる。このようなアーカイヴの力を探るため、イメージの人類学 [箭内 2008] も踏まえ、今後丹念に議論を進めたい。

たちの意味付けに逆らってアーカイヴが触発する想起の体験でもあった。「ジプシーの歴史」という一見滑らかに編まれた織物を「さかなでする」その身振りのうちに、追悼式典で表象されたような全体的な物語へとたやすく転化していかない個別特異な生の痕跡が現れていた。

遺族や非ジプシーを含めた不特定多数の人々が、インターネット上の「記憶の場」に何を見るのか、権力かそれ以上のものかという点に関しては、さらなる検証が必要である。しかし、このアーカイヴの「記憶の場」には、次のような記憶の分有の可能性が浮上する。

まず、出来事の当事者たちの記憶の分有である。彼らは一つの出来事／物語のなかに共に並べられつつも、その個別特異な生の痕跡により決定的に分離してもいる。この差異の分有としての共同性は、同一性を主張しないため、慰霊碑等の「想起の媒体」と追悼式典を通して表現された「ジプシー」という集団性を不安定にするものだ。さらに、この「記憶の場」では、数行の言葉に要約された人生や半ばで途切れた人生の露呈、そしてそうした個人がおのおの別様の仕方で辿り、思いがけず残すことになった生の痕跡に直に触れるという感覚的な体験が生じる。それらは、「出来事の当事者たち」と「それを見る人々」のあいだに記憶の分有という事態を生起させる。集団的過去を表象する慰霊碑とは異なり、きわめて物質的で断片的なかたちで個人の生の想起を導く「想起の媒体」としてのアーカイヴが、問いと想像を見る者に与え、「ジプシーの過去」の追憶・追悼（再現前・記念）以上のものを、それらが差しだされる記憶共同体、つまりジプシー、非ジプシーを問わない不特定多数の人々に迫る可能性が浮上する。ここには、非ジプシーによる迫害の告発のみならず、非ジプシー由来の「記録の媒体」としてのアーカイヴを「想起の媒体」へと変換する「喪の作業」、そしてジプシーという集団の境界を超えた共同性が出現する契機が孕まれている。

このような「想起の媒体」としてのアーカイヴがもたらす効果を通して、活動家のコモラシオン運動は、マヌーシュの沈黙の記憶行為と繋がりあう。インターネット上に開示された公的アーカイヴは、「記録の媒体」としての本来の性格、活動家やアーカイヴ作成者の意図にかかわらず、「ジプシーの歴史」として集合化・表象不可能な個人の特異な生の痕跡を見る者に感受させる「想起の媒体」として現れ出る。それは、追悼式典において呈示された「ジプシー」という集団性とそれをめぐる物語化という集団表象のプロセスに抗うのである。他方でマヌーシュも、アーカイヴという記憶媒体の開示とは明確に異なる方法であれ、沈黙を通して死者の個別特異な生の痕跡を現在に留めおき、一つの共通の本質や集団の永続性の保障という目的のもとに死者を集団的全体に溶解させることのない共同性を紡ぐ。

確かに、記憶が誰に向けて差しだされるのかという点では、活動家とマヌーシュのあいだには決定的な差異が横たわる。マヌーシュが沈黙の振舞いを通して個々の死者の記憶を個別的で親密な領域にとどめようとするのに対し、活動家は、アーカイヴという「想起の媒体」を通して、親密な他者であるか否か、ジプシーであるか非ジプシーであるかという属性を問わない、記憶の受け手も定まらない境界の不明瞭な共同体に向けて、無名の個人

の記憶を差しだしていた。両者は異なる方法と「想起の媒体」を通して他者の記憶に触れ、分かち合おうとする。しかし、このような違いにもかかわらず、沈黙とアーカイヴをめぐる二つの記憶行為は共に、集団の物語に回収されない個人の特異な生／記憶をめぐる生じ、物語化に抗いながら、その分有の体験を触発するのである。

<付記>

本稿のもととなった調査研究は、日本学術振興会科研費 26・1847（特別研究員奨励費）、および 17K1358 の助成を受けたものである。

<参照文献>

- エスポジト、ロベルト 2009 『近代政治の脱構築——共同体・免疫・生政治』岡田温司訳、講談社選書メチエ。
- 左地亮子 2014 「沈黙の共同性——フランスのマヌーシュ共同体における「沈黙の敬意」に関する考察」『文化人類学』78(4): 470-491。
- 2016 「「ジプシー」をめぐる政策の人類学試論——ノマド、移動生活者、ロマに対するフランスの法政策の分析を中心として」『文化人類学研究』17: 91-107。
- 2017a 『現代フランスを生きるジプシー——旅に住まうマヌーシュと共同性の人類学』世界思想社。
- 2017b 「ジプシーの共同想起なき記憶行為と時間の経験——南仏ジプシー巡礼祭に織りこまれた迫害の記憶と隔離の空間をめぐる」『Contact Zone』2017: 34-71。
- 菅香子 2017 『共同体のかたち—イメージと人々の存在をめぐる』講談社選書メチエ。
- 田中雅一 2017 「ナンバリングとカウンティング——ポスト=アウシュヴィッツ時代の人類学にむけて」渡辺公三・石田智恵・富田敬大編『異貌の同時代—人類・学・の外へ』以文社、pp.97-137。
- ディディ=ユベルマン、ジョルジュ 2006 『イメージ、それでもなお——アウシュヴィッツからもぎ取られた四枚の写真』橋本一径訳、平凡社。
- ナンシー、ジャン=リュック 2001 『無為の共同体——哲学を問い直す分有の思考』西谷修他訳、以文社。
- 野家啓一 2007 『歴史を哲学する（双書 哲学塾）』岩波書店。
- フォスター、ハル 2016 「アーカイブ的衝動」中野勉訳・解題『Я [アール] —金沢 21世紀美術館研究紀要』6: 32-48。
- フーコー、ミシェル 1977 『監獄の誕生——監視と処罰』田村俣訳、新潮社。
- 2006 「汚辱に塗れた人々の生」『フーコー・コレクション6』丹生谷貴志訳、ちくま学芸文庫。
- ベンヤミン、ヴァルター 1994 「歴史の概念について」『ボードレール 他五篇（ベンヤミンの仕事2）』野村修編訳、岩波文庫。
- 箭内匡 2008 「イメージの人類学のための理論的素描——民族誌映像を通じての「科学」と「芸術」」『文化人類学』73(2): 180-199。

- 渡辺和行 1998 『ホロコーストのフランス—歴史と記憶』人文書院。
渡辺公三 2003 『司法的同一性の誕生——市民社会における個体識別と登録』言叢社。

- Alphen, Ernst van 2014 *Staging the Archive: Art and Photography in the Age of New Media*. London: Reaktion Books.
- Didi-Huberman, Georges 2012 *Peuples exposés, peuples figurants: L'oeil de l'histoire Tome 4*. Paris: Minuit.
- Farge, Arlette 1989 *Le goût de l'archive*. Paris: Éditions du Seuil.
- Filhol, Emmanuel 2013 *Le contrôle des Tsiganes en France (1912–1969)*. Paris: Karthala.
- Gay y Blasco, Paloma 1999 *Gypsies in Madrid: Sex, Gender and the Performance of Identity*. Oxford: Berg.
- Hirsch, Marianne 2012 *The Generation of Postmemory: Writing and Visual Culture After the Holocaust*. New York: Columbia University Press.
- Pernot, Mathieu 2001 *Un camp pour les Bohémiens: mémoires du camp d'internement pour nomades de Saliers*. Arles: Actes Sud.
- Sekula, Allan 1990 The body and the archive, in Richard Bolton ed., *The Contest of Meaning: Critical Histories of Photography*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Stewart, Michael 1997 *The Time of the Gypsies*. Boulder, Colorado: Westview Press.
- 2004 Remembering Without Commemoration: The Mnemonics and Politics of Holocaust Memories among European Roma. *The Journal of the Royal Anthropological Institute*. 10(3): 561-582.
- Williams, Patrick 1993 *Nous, on n'en parle pas: les vivants et les morts chez les Manouches*. Paris: Maison des Sciences de l'Homme.

インターネット資料

- 「サリエ・キャンプ 1942 – 1944——受け継がれる一つの記憶」
<https://saliersuncamppourlestsiganes.blogspot.jp/> 2018年1月5日最終閲覧（2018年5月現在、削除されている）
- 「フランス・ノマド・メモリアル」<http://memorialdesnomadesdefrance.fr/>
2018年1月5日最終閲覧
- 住宅・持続的居住省（Ministère du Logement et de l'Habitat durable）ウェブサイト <http://www.logement.gouv.fr/adoption-definitive-du-projet-de-loi-egalite-et-citoyennete>. 2018年1月5日最終閲覧

**Silence and Archives against Narrative :
A Study of Two Kinds of Memory Practice among French Gypsies**

Ryoko SACHI

Keywords : Gypsies, memory, silence, archives, commemoration

Manouches, known as Gypsies living in France, do not speak of their dead and explain this form of silence as a “sign of respect”. They avoid disclosing personal memories of the dead in the public sphere for fear that such an act of “representation” might treat incorrectly or distort the dead’s being. Whereas, in recent years, commemorative practices surrounding the internment of Gypsies during World War II are gaining momentum in France. Some Gypsy activists have carried out a series of commemorative practices, which consist in the disclosure of archival materials related to Gypsies interned in “camps for Nomads”, as well as the creation of memorials, monuments, and ceremonies to honor the victims. Their attitudes toward their memory are seemingly opposed to those of Manouches.

This paper examines these two kinds of memory practice, commemoration and its evasion, among French Gypsies. Its aim is not only to explore significant gaps and differences among them, but also to illuminate their connection to one another, deconstructing the opposition between silence and archives and between oral and written memory. To do this, it is necessary to investigate the effect of archives used in the commemorative practices for Nomads’ camps. Gypsy activists try to create the “lieu de mémoire” (memory place), by releasing on the Internet numerous archives of the victims such as a photographic identity document (Anthropometric Booklet for Nomads), which is made out and collected by the institutions of the state for surveillance and internment of French Gypsies. It is apparent that the main purpose of this commemoration is to gain the public recognition of the persecution toward French Gypsies, which has remained as “forgotten history”. However, beyond the intentions of the activists to represent the collective history of French Gypsies, what appears in this online memorial site is not a totalizing story which reduces individuals called Gypsies to a single category or their personal experiences to a single history, but rather plentiful traces of individuality i.e. traces of “a life” that each person experienced in a specific and unique way. It is an effect of the archives as image, as a medium of remembrance. In such an effect that archives can have beyond and against narratives, activists’ archival work and Manouches’ silence join each other, both inspiring experiences of community not as a whole but as “partage” (sharing-division) of the one’s unique life and memory.